

チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(3)

五島清隆

1 はじめに

本稿は、五島 [2009][2010] の続編である。校合に用いた写本大蔵経 (B: パタン, K: 河口慧海将来本, L: ロンドン・シェルカル, Ph: プタク, T: トク・パレス) と版本大蔵経 (C: チョーネ, D: デルゲ, H: ラサ, N: ナルトン, P: 北京) の詳細に関しては、五島 [2003][2009] を参照願いたい。¹

一般に初期大乘經典では、たとえば『八千頌般若経』や『法華経』などのように、初期形成立後、時代の経過とともに様々な形で編集の手が加えられ、分量の増広ばかりでなく、内容的にも大きく変容していることが多い。ところが、不思議なことに本経は、現存形に近いものが最初に成立して以降 (おそらく、初期形は現存資料の中では鳩摩羅什訳 (Ch2) の原典が最も近いと思われる)、わずかな語句の入れ替えや付加を除いてほとんどその内容、分量ともに変化することなく今日に伝えられて来ている。しかもチベット訳と菩提流支訳 (Ch3) とは全く章分けをせず²、竺法護訳 (Ch1) と Ch2 はともに全体を十八品に分けるが、各品名はかならずしもその内容を充分に表示しているわけではない³。これはどういうことを意味しているのだろうか。本経は初期形成立後、ほとんど注目されることなく、その結果、編集・増広も、内容の深化も、エピソードや比喻の洗練もなされなかったのであろうか。しかし、前稿 (五島 [2010]) 89 頁で指摘したように、いわゆる中観派や瑜伽行派の学匠たちはこの『梵天所問経』を重要な経証として盛んに引用す

¹ このほか、本稿で用いる符号、記号、諸形式などについても前稿のそれらに準じている ([2009] 142-143 頁参照)。なお、脚注番号が指示する箇所が長い場合、その範囲を明確に示すために、例えば (1)..., ... (1) のように表記していたが、本稿では 1→, ←1 としている。この番号は、当該範囲の最後にくるべき番号で示される。

² 唯一の例外が第二巻に見られる「『大悲の法門』というこの章」という章名である (五島 [2010] 118 頁)。これは、本訳の分節 VIII(1-4) に相当する部分を指したものである。

³ 本訳におけるローマ数字による分節は、大正新脩大蔵経の脚注にみられる契丹大蔵経の章段 (全二十四品) を中心にして Ch1, Ch2 の分節を勘案して分けたものである。第三巻までの契丹蔵との関係は以下の通りである。如来光明品第一 = I, 四法品第二 = II, 菩薩正問品第三 = III, 菩薩出過世間品第四 = IV・V, 歎功德品第五 = VI, 如来五力説品第六 = VII, 如来大悲品第七 = VIII, 幻化品第八 = IX・X・XI, 菩薩光明品第九 = XII・XIII・XIV, 菩薩授記品第十 = XV, 薩婆若品第十一 = XVI・XVII。また、チベット訳との関係は、第一巻 = I~III, 第二巻 = IV~X, 第三巻 = XI~XVII である。

る。つまり、思想史的には極めて重要な経典と見なされていたことになる。また、これも同じく前稿 89-91 頁で説明したことだが、本経は『法華経』(ここで比較の対象とするのはほぼ現存形に近いものである)と共通するエピソード(増上慢の比丘の会座からの退出、地涌の菩薩)や重要な思考枠(如来の五力、三乗・一乗、授記など)が見られる。また、前稿および本稿の訳註に示されているように『維摩経』との関係も濃密である。

ここで両経と本経との関係をめぐって、いささか大胆な仮説を提起しておきたい。一般的に言って、初期大乘経典はいわばそれぞれの経典がゆるやかなネットワークの中にあって、いろいろな点で相互に影響を与え合っていたと思われる。思想的立場が大きく異なる『法華経』や『維摩経』もその例外ではないが、『梵天所問経』はそのネットワークの中でもいわば中核的役割を果たした経典の一つであったと考えたい。具体的に言えば、『梵天所問経』は『法華経』や『維摩経』の現存形が成立する以前に、さまざまな登場人物、エピソード、思考枠や用語を駆使して、いわば大乘仏教運動の課題問答集のような形で一気に成立した。全体の構成も洗練されておらず、人物像の造形も必ずしも明確ではなく、テーマも多様で、話題の転換も必ずしも説得性・必然性のあるものではない。結局、最後まで、全体の統一性を高めるべく整理・増広されることはなかったが、そこに見られる新鮮な発想、巧みな比喻、登場人物の含蓄の深い対話、そしてなによりも初期大乘経典に特有の思想的な純粋性・先鋭性が魅力的であり、後の大乘論書の作者たちばかりでなく、大乘経典の作者たちにも大きな刺激を与え、彼らはこの『梵天所問経』に見られる用語、思想、人物像、結構などを自らが作成する経典の中で継承・発展させていったと言えないだろうか。経典間の先後関係は、それぞれの経典の成立事情や発展形態などの諸事情により、一概に決定できないが、そういう点で、『般若経』がその後に成立する諸経典に与えたような影響をこの『梵天所問経』は与えたのである。そしてこれは中期大乘経典にも及んだと考えたい⁴。

さて、第三巻の内容であるが、冒頭、サマンタクスマ菩薩とシャーリプトラによる法界と智慧の関係についての対論から始まるが、これは、第二巻末尾に見られた「一切法は自性として幻術によって化作されたものであり無完成なものである」「一切行は非行である」とするヴィシェーシャチンティンとジャーリニープラバ菩薩の所論を受けたものである。次いで、ジャーリニープラバ菩薩による放光と、それに導かれて現れる4人の地涌の菩薩のエピソード(Ch1とCh2では4人の菩薩名は明示されない)が述べられ、前半部が終わる。後半部では、ジャーリニープラバ菩薩が成仏の授記を受ける事になるが、その授記の意義と悟りの内容をめぐってジャーリニープラバ菩薩とマハーカーシャパの対論があり、授記に関連してヴィシェーシャチンティンが行(菩提行)について質問することになる。注目すべきは、この行・非行のテーマに関し、いわゆる「サムエの宗論」の資料とされる『頓悟大乘正理決』(Pelliot No.4646)と『修習次第・後篇』とが本経のこの部分とともに経証として引用している点である。前者は漢訳にしたがい文字通り「不行」として行そのものの否定を主張し、後者は、無相・無執着(つまり行・非行の不二)の行は修行者にとって不可欠であり、行の否定は諸経典(特に『梵天所問経』)の教えに反することを論証している。経はこの後、この行・非行の不二の境地に入ることつまり一切行を超越することによって六波羅蜜多は完成され、一切知者性を獲得するとする。本経における一切知者性の分析は初期大乘経典のなかでは精密な方である。

⁴ 例えば、『楞伽経』中の「一尋ほどの身体において、世間と世間集と、滅に至る道があると私は仏子たちに説く」や、『大乘涅槃経』中の「もし[そのような]苦を苦聖諦と言うのであれば、[畜生である]牛、羊、ロバ、馬や地獄の生き物すべてに[苦]聖諦があることになってしまう」という仏陀の言葉は、本経に由来していると考えられる。五島 [2010] 97-98 頁参照。なお、前者の例は SN vol.1 62.19-22 に由来する一節である。

今回も公開されている多くの電子情報を利用させていただきました。

2 和訳と訳注

第三卷 (bam po gsum pa)

(XI-1)

³⁶→ その時、サマンタクスマ (普華 *Samantakusuma, S)⁵ という名の菩薩が、その集会にやって来ていた。彼は長老 (*sthavira) シャーリプトラ (*Śāriputra, Ś) にこう語った。

「⁷→ 長老は、如来によって智慧あるものの中で最高 (智慧第一) と言われてはいますが⁶ が、このように、智慧の弁才 (*prajñāpratibhāna) によってこの「正しい人々 (ジャーリニープラバとヴィシェーシャチンティン) が發揮した」ような自在力 (*vikurvaṇa) を自在に現すことができません。長老は、法界を理解 (*adhigata) していないのでしょうか^{←7}」

長老が言う。「⁸→ サマンタクスマよ、世尊の声聞 (弟子) たちは、範囲 (*viṣaya) に応じて説くのです^{←8}」

[S が] 言う。「大徳 (*bhadanta) シャーリプトラよ、法界 (*dharmadhātu) は、その範囲を計れるものではないか」

[Ś が] 言う。「そのようなことはありません」

[S が] 言う。「⁹→ 長老シャーリプトラよ、では、どのように範囲に応じて説くのでしょうか^{←9}」

[Ś が] 言う。「声聞は〔自らが〕理解した分についてそれだけを説くのです」

[S が] 言う。「長老は、法界にはその範囲が無量 (*apramāṇa) であるという特相 (*ākāra) があることを理解していますか」

⁵ BP 第四巻ではサマンタクスマは菩薩を次のように定義する。「世尊よ、もし菩薩が十方世界において一切の仏国土が、まるで花がいっぱいに咲き満ちているかのごとくに、如来によって〔満たされている〕のを見れば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれる」(P 70b7)。なお、『二万五千頌般若経』では、マンジュシュリーが住む仏国土 (パドマーヴァティー) の教主がサマンタクスマ如来である (Pvsp17.17-19)。また、『ラリタヴィスタラ』では、成道後一週間もの間結跏趺坐を解くことのなかった釈尊に対して、天子 (devaputra) であるサマンタクスマがその理由と、それまで入っていた瞑想の名を尋ねる (LV 269.11-270.4)。

⁶ Cf. AA 「彼 (シャーリプトラ) は実に、第二の教主、法軍の将、法輪を転じる者であり、智慧ある者の中で最高だと世尊によって示されている」 sa hi dvitīyaśāstā dharmasēnādhipatir dharmacakrapravartanaḥ prajñāvātām agro nirdiṣṭo bhagavatā. (88.19-20)

⁷ Ch2 は「長老シャーリプトラよ、あなたは既に法界を得ており、仏もまたあなたを智慧人中の最第一と称えているのに、どうして智慧の弁才という自在力を發揮できないのですか」とする。なお、阿含において、<シャーリプトラは法界に通達しており (sāriputtassa dhammadhātu suppaṭividdhā), 仏陀が異なる文章、異なる方法で質問しても、それに応じて異なる文章、異なる方法で、自由に答えることができる> (SN vol.II 56.4-29) とされている。

⁸ Tib: bcom ldan `das kyi nyan thos rnam ni yul ji lta ba bzhin du ston to. Ch1: 世尊説余於聲聞上知其境界。Ch2: 普華、佛諸弟子隨其智力能有所説。Ch3: 善男子、隨智慧力、佛説我於聲聞弟子智慧人中最高第一能有所説。Tib と Ch2 は、<世尊の声聞 (仏弟子) は、その智慧の範囲に応じて説く> とするのに対して、Ch1 と Ch3 は、<世尊は、その智慧の範囲に応じて、私を声聞の中で智慧第一だと仰った> とする。

⁹ Ch1: 云何、耆年、有所講説如其境界。Ch2: 汝云何言、佛諸弟子隨其智力能有所説。Ch3: 若法性境界無多少者、汝云何言、隨智慧力、佛説我於聲聞弟子智慧人中最高第一能有所説。Ch1 は Tib に近いが、Ch3 は註 4 で指摘した他伝本との相違がここにも反映している。

〔Śが〕言う。「良家の子よ、そのように〔理解しています〕¹⁰」

〔Sが〕言う。「法界には量の基準(*pramāṇa) というものが存在しない [P51b] ので、法界は無量なのです。大徳シャーリプトラよ、〔そういう〕無量の理解に応じて無量を説くのであって、¹¹それをどうして〔あなたは自分が〕理解したことにしたがって、その通りに説く〔と範囲を区切って言う〕のでしょうか←¹¹」

¹²→〔Śが〕言う。「サマンタクスマよ、法界には理解という特質(*lakṣaṇa) はありません」←¹²

〔Sが〕言う¹³。「大徳シャーリプトラよ、法界に理解という特質がないのであれば、いったいあなたは法界とは別のところで¹⁴解脱するのでしょうか」

〔Śが〕言う。「そんなことはありません」

¹⁶→〔Sが〕言う。「なぜですか」

〔Śが〕言う。「法界が分断されることになってしまう¹⁵からです」←¹⁶

〔Sが〕言う。「大徳シャーリプトラよ、だからこそ、〔無量たる〕法界とその理解とは同じなのです」

〔Śが〕言う。「サマンタクスマよ、私は説きたいとは思わない、私はむしろ聞きたいのです」

〔Sが〕言う¹⁷。「大徳シャーリプトラよ、一切の法は、変化することのない(*avikāra, avipariṇāma) 法界に決定しているのに、どうして説いたり、聞いたりしなければならないのでしょうか」

〔Śが〕言う。「そんなことはありません」

(XI-2)

〔Sが〕言う。「それでは、なぜ、あなたは、＜私は聞きたいのであって、説きたいとは思わない＞と考えるのですか」

〔Śが〕言う。「良家の子よ、如来は、『敬虔に法を説く者と敬虔に法を聞く者¹⁸との、この両者は福德を多く生じる』とおっしゃっています。それゆえ、あなたは説きなさい。私は聞きます」

〔Sが〕言う¹⁹。「長老シャーリプトラよ、一切の想と受とが滅した三昧(滅尽定)に入った状態で法を聞くことができますか」

〔Śが〕言う。「良家の子よ、＜聞かなければならない＞という二つ〔の対立する想〕を起こす

¹⁰ Ch1:如是. Ch2:然. Ch3:無也(=無量也).

¹¹ Tib:de ji ltar gang gi khong du chud pa ji 'dra bar de'i bstan pa yang de 'dra bar 'gyur. Ch1:何謂隨其所入所説亦然. Ch2, 3:汝云何言隨所得法而有所説.

¹² Ch1:又問. 普華. 其法性者無入相乎.

¹³ Ch1:答曰.

¹⁴ Tib:chos kyi dbyings dang tha dad du. Ch1:設殷勤法性. Ch2, 3:出法性.

¹⁵ Tib:chos kyi dbyings tha dad par 'gyur ba. Ch2, 3:壞法性.

¹⁶ Ch1 はこの部分を欠く.

¹⁷ Ch1:答曰.

¹⁸ Tib:gang gus par chos bstan pa dang gang gus par chos nyan pa. Ch1: 專精説法一心聽者. Ch2, 3:一者專精説法二者一心聽受. Cf. SP: yaḥ satkṛtya śṛṇuyāt (350.14). Tib:gang gis sti stang du byas te mnyan. 法護訳:專精聽受. 羅什訳:一心聽受.

¹⁹ Ch1:梵天又問(→ 普華又問).

ことは、滅〔尽定〕においてはありません」

〔Sが〕言う。「長老シャーリプトラよ、一切の法は本性として滅していることを認めますか²⁰」

〔Śが〕言う。「良家の子よ、その通りです。一切の法は寂滅しています。〔私はこのことを認めます〕²¹」

〔Sが〕言う。「それゆえ、長老シャーリプトラよ、常にずっと²² 聞くことはできないのです (*akalpa²³). なぜなら、一切の法は本性として滅しているからです」 [P52a]

〔Śが〕言う。「良家の子よ、あなたは、三昧から出ることなく法を説くことができますか」

〔Sが〕言う。「長老シャーリプトラよ、常に三昧に入った状態にない法を一つでも認識することなどあるでしょうか」

〔Śが〕言う。「そんなことはありません」

〔Sが〕言う²⁴。「それなら、愚かな凡夫たちもすべて、三昧に入った状態にあることになり

ます」

〔Śが〕言う。「良家の子よ、どのような三昧の中に、愚かな凡夫たちは入っているのでしょうか」

〔Sが〕言う。「揺るぎのない法界という三昧 (*Akṣobhyadharmadhātusamādhi) においてです²⁵」

〔Śが〕言う。「良家の子よ、もしそうなら、凡夫と聖人の間に区別がなくなってしまいます」

〔Sが〕言う。「大徳シャーリプトラよ、その通りです。私は、凡夫と聖人を区別したくはないのです。なぜなら、聖人たちはどんな法も滅することはないし²⁶、凡夫たちもどんな法も生じることではなく、〔両者とも〕かの法界平等性²⁷ なるものから出てはいないからです」

(XI-3)

〔Śが〕言う。「良家の子よ、諸法の平等性とは何でしょうか」

〔Sが〕言う。「長老がよくご存知のことです²⁸。長老は聖人の法 (聖人のあり方) を生じましたか」

²⁰ Tib: chos thams cad rang bzhin gyis 'gags par 'dod dam. Ch1:身寧樂志于寂於本淨及諸法乎. Ch2:汝信佛說一切法是滅盡相不. Ch3:汝信諸法皆是自性滅盡相不. Cf. Asp:「スプーティよ、本性として自性が滅している法が滅することがあるか。〔スプーティが〕言う。世尊よ、それは決してございませぬ」 subhūte yo dharmāḥ prakṛtyā svabhāvaniruddha eva, sa dharmo nirottyate. āha. no hīdaṃ bhagavan. (176.2-3)

²¹ Ch2,3:我信是説.

²² B:rgyun mi 'chad par (*samitam). HT:mi 'chad par. CDKLNPPH:mi chad par.

²³ P:bskal pa med do. BCDHKLNPhT: skal ba med do. AD: kalpa, able, competent. Ch1:不能堪任. Ch2, 3:不能.

²⁴ Ch1:梵天又曰(→ 普華又曰).

²⁵ Ch1:一切諸法而無所趣, 曰常定.

²⁶ Ch3:聖人無所得一法.

²⁷ Cf. Gv:「人々は、かれら〔薬王のようなすぐれた菩薩がた〕にお会いするや、法界平等性に住することによって、涅槃という安樂を得ます」 yeṣāṃ sahadarśanena sattvā nirvṛtisukhaṃ pratilabhante dharmadhātusamatāsthānena. (119.4-5)

²⁸ Tib:gang gnas brtan gyis yongs su shes pa de yin (BPh:yin, CDHKLNPT:ston) te. Ch1:如耆年身所分別知. CH2,3:如舍利弗所得知見.

〔Śが〕言う。「そんなことはありません」

〔Sが〕言う。「あなたは、凡夫の法(凡人のあり方)を滅しましたか」

〔Śが〕言う。「そんなことはありません」

〔Sが〕言う。「では、あなたは、聖人の法を獲得しましたか」

〔Śが〕言う。「そんなことはありません」

〔Sが〕言う。「では、あなたは凡夫の法をよく理解²⁹ しましたか」

〔Śが〕言う。「そんなことはありません」

〔Sが〕言う。「それでは、長老は、なにをよく理解したことによって悟りを得た(*abhisamaya)のですか³⁰」

〔Śが〕言う。「多聞でない³¹ 愚かな凡夫の如(ありのまま姿)が、無間解脱³² の如であり、それはまた涅槃の如³³ でもあるのです」

〔Sが〕言う。「大徳シャーリプトラよ、その如は、誤りのない如、別異性のない如、[P52b] 変化するものがない如、揺らぐものがない如です。大徳シャーリプトラよ、この如によって、一切法の如³⁴ を理解すべきです」

(XI-4)

そのとき、具寿(*āyusmat³⁵) シャーリプトラは、世尊に次のように申し上げた。

「世尊よ、たとえば、燃え上がった火のかたまり(*agniskandha)の炎はすべての〔ものを〕焼き尽くすことに奉仕する(*pratypasthita)ように、世尊よ、それと同じように、これら良家の子たちによる教説はすべて法界の教説であり、すべての法の教説は、あらゆる煩惱を焼き尽くすことに奉仕します」←³⁶

²⁹ Tib:yongs su shes pa (*parijñā). Ch1:分別. Ch2, 3:見.

³⁰ Ch1:云何耆年分別知時. Ch2:汝何知見説言得道. Ch3:汝何知見説言得法耶.

³¹ Tib:thos pa dang mi ldan pa. Ch1:如所聞法離於凡夫. Ch2:汝不聞. Ch3:可不聞如.

³² Tib:rmam par grol ma thag pa'i de bzhin nyid (*anantaravimuktitatathā). Ch1:平等亦如無有解脫. Ch2,3:漏盡解脫如.

³³ Tib:yongs su mya ngan las 'das pa' i de bzhin nyid (*parinirvānatathā). Ch1:滅度亦如無本亦如. Ch2,3:無餘涅槃如.

³⁴ Tib:chos thams cad kyi de bzhin nyid (*sarvadharmatathā). Ch1:一切諸法. Ch2,3:一切法.

³⁵ 本経では、釈尊の弟子たちを、長老(gnas rtan, sthavira)、大徳(btsun pa, bhadanta)、具寿(tshe dand ldan pa, āyusmat)などの語で呼称している。このうち、ここで用いられた具寿(āyusmat)はパーリ語では āyasmā, āvuso という呼びかけの言葉に対応し、若い人にも適用されることがあるが、大乘経典では3語ともほぼ同じ意味の賢者に対する敬称と取っていいだろう。

³⁶ [引用]『大智度論』*この引用は第二巻の末尾(註196)の続き。[]内は第二巻での引用箇所。

〔Ch:〕[如明網經中説。

慧命舍利弗白佛言。「世尊、是諸菩薩所説若能解者大得功德。何以故、是諸菩薩乃至得聞其名字得大利益。何況聞其所説。世尊、譬如人種樹不依於地而欲得其根莖枝葉成其果實是難可得。諸菩薩行相亦如是。不住一切法而現住生死、在諸佛世界於中自恣樂説智慧法。誰有聞是大智慧遊戲自恣樂説法、而不發阿耨多羅三藐三菩提意者」爾時會中有普華菩薩語舍利弗「佛説耆年於諸弟子中智慧第一。今耆年於諸法性不得耶。何以不以大智慧自恣樂説法」舍利弗言。「諸佛弟子如其境界則能有説」普華菩薩復問。「法性有境界不」舍利弗言。「無也」「若法性無境界、云何耆年言如其境界則能有説」舍利弗言。「隨所得而説」普華又問。「耆年以無量相法性爲證耶」舍利弗言。「爾」普華言。「今云何言隨所得而説。如所得法性無量説亦應無量。法性無量非量相」舍利弗語普華言。「法性非得相」普華言。「若法性非得相、汝離法性得解脫不」舍利弗言。「不也」「何以故」「法性不壞相故」普華言。「汝所得聖智亦如法性耶」舍利弗言。「我欲聞法非説時也」普華言。「一切法定在法性中、有聞者説者不」舍利弗言。

世尊が仰せになる。「シャーリプトラよ、その通りだ。〔おまえの〕説いた通りだ。これらの良家の子たちによる教説はすべて法界の教説であり、すべての法の教説はあらゆる煩惱を焼き尽くすことに奉仕する」

(XI-5)

そのとき、法王子 (*kumārabhūta)³⁷ であるジャーリニープラバ (Jālinīprabha 縵網より光明を發する者、J)³⁸ は、シャーリプトラに次のように言った。

「長老シャーリプトラよ、〔あなたは〕世尊によって『智慧ある者の中で最高だ』と言われましたが、長老シャーリプトラよ、世尊によって『智慧ある者の中で最高だ』と言われたその智慧とは何ですか」

〔Śが〕言う。「ジャーリニープラバよ、声聞は声に従う者であり、³⁹ 自らの〔心〕相續を輝かすことを特徴としています。←³⁹ わずかな知によって解脱を得る者たちの智慧です。そういう智慧によって私は『智慧ある者の中で最高だ』と言われたのであって、菩薩の智慧によって、ではありません」

〔Jが〕言う。「智慧は戲論 (*prapañca) を特質としているのですか」。

〔Śが〕言う。「そんなことはありません」

〔Jが〕言う。「それでは、智慧は平等性に従う (*anucārin) ののですか」

〔Śが〕言う。「良家の子よ、そうです」

〔Jが〕言う。「長老シャーリプトラよ、平等性に従う智慧によって、どうして智慧が分量 (*pramāṇa) を持つと〔あなたは〕言うのですか」

〔Śが〕言う。「良家の子よ、法界という [P53a] 因によって (rgyus, *hetunā) 智慧は無量です。対象に応じて知 (*jñāna) が働くことによって分量がはかられるのです⁴⁰」

⁴¹〔Jが〕言う。「大徳シャーリプトラよ、知は無量でしょうか、それとも有量でしょうか」

「無也」普華言。「汝何以言『我欲聞法非說時』」舍利弗言。「佛說『二人得福無量。一心說者。一心聽者』」普華言。「汝入滅盡定中能聽法不」舍利弗言。「善男子。滅盡定中無聽法也」普華言。「汝信受一切法常滅相不」舍利弗言。「信是事」普華言。「法性常滅無聽法也。何以故。諸法常滅相故」舍利弗言。「汝能不起于定而說法不」普華言。「無有法非定相者」舍利弗言。「若爾者。今一切凡夫皆是禪定」普華言。「爾。一切凡夫皆是禪定」舍利弗言。「以何等禪定故。一切凡夫皆是」普華言。「以不壞法性三昧故。一切凡夫皆是禪定」舍利弗言。「若爾者凡夫聖人無有差別」普華言。「我亦不欲令凡夫聖人有差別。何以故。諸聖人無有滅法。凡夫人亦無生法。是二皆不出法性等相」舍利弗言。「善男子。何等是法性等相」答言。「耆年得道時所知見者是」又問。「生聖法耶」「不也」「滅凡夫法耶」「不也」「得聖法耶」「不也」「見知凡夫人法耶」「不也」「耆年以何知見故得聖道」舍利弗言。「凡夫人如比丘得解脫如。比丘入無餘涅槃如。是如一如如無別」普華言。「舍利弗。是名法性相如不壞如用是如。當知一切法皆如」舍利弗白佛言。「世尊。譬如大火聚無物不燒。是諸上人所說亦如是。一切法皆入法性」(Taisho vol.25 267a16-c7)

³⁷ 「童真」の方が kumārabhūta(真実の童子 (= 梵行者)) の原義に近いが、今は「法王子」としておく。平川 [1995] および袴谷 [2000a] 参照。

³⁸ T: dra ba can gyi 'od. Ch1:明網. Ch2,3:網明. 五島 [1988] 参照。なお、BP 第四巻では、ジャーリニープラバは菩薩を次のように定義する。「世尊よ、もし菩薩の光が人々の一切の煩惱を鎮めるのであれば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれる」(P 70b6)。

³⁹ Ch1:自照身. Ch3:自照身相. Ch2 はこの部分を欠く。

⁴⁰ Ch1:繫在限者從其境界. 因本慧行而有所入. Ch2, 3:隨入法性多少故智慧有量。

〔Śが〕言う。良家の子よ、知は無量です」←⁴¹

〔Jが〕言う。「では、無量であるものを、どうして有量と説くのですか」
その時、長老シャーリプトラは、黙したままであった (*tuṣṇībhūto 'bhūt).

(XII-1)

その時、仏の威神力 (*anubhāva) によって具寿マハーカーシャパは世尊にこう申し上げた。
「世尊よ、法王子であるジャーリニープラバを、何故にジャーリニープラバと言うのでしょうか」

その時、世尊はジャーリニープラバ法王子に次のように仰った。「良家の子よ、善根によって清められた (*parikarmita) 光を汝は現しなさい。それによって、神々を含むこの世間が喜び、善根を成就し、無上正等覚に心を起こすでしょう」

(XII-2)

その時、ジャーリニープラバ法王子は、「かしこまりました」と世尊にお答えして、偏袒右肩して右膝を地に立てて世尊に向かって合掌して、縵網のある右手の赤銅色の爪⁴² から光を放った。その光は無量無辺の世界を通過して十方の無量の仏国土を輝きで満たした。十方の無量無数の世界には、地獄の生き物、畜生に生まれた生き物、ヤマ世界〔の生き物〕、目の見えない人、耳の聞こえない人、背骨の曲がった人、手のない人、病気のある人、貪欲な人、怒りのある人、愚かな人、裸形の人、餓えている人、渴している人、縛られている人、捕らえられている人、貧しい人、痩せ衰えた人⁴³、年老いた人、[P53b] 死にそうな人⁴⁴、物惜しみをする人⁴⁵、〔他人を〕苦しめようと思っている人⁴⁶、破戒した人、強欲な人⁴⁷、〔怠けている人〕⁴⁸、ぼんやりしている人、悪い智慧のある人⁴⁹、信心のない人⁵⁰、少聞の人、功德の少ない人⁵¹、無慚無愧の人、邪見にとらわれている人がいるが、そのような人たちは、すべて、その光に会うや、一切の樂を得た。どんな人も、貪欲・瞋恚・愚癡・驕慢、⁵² 自らの罪の隠蔽 (*mrakṣa)・嫉妬 (*īrṣyā)・憤怒 (*krodha) の焼かれるような苦しみ (*paridāha) に迫られる ←⁵² ことがなくなった。すべての人々が歡喜と幸福を

⁴¹ Ch2 はこの部分を欠く。

⁴² Tib: lag pa g' yas pa dra ba can gyi sen mo zangs lta bu. Ch1: 右掌縵網指爪. Ch2: 右手赤白莊嚴爪指間. Ch3: 右手白赤莊嚴羅網指間. Mvy 262: jālāvanaddhahastapādāḥ, phyag dang shabs dra bas 'drel ba. Mvy 269: ātāmrānakaḥ, sen mo zangs kyi mdog lta bu.

⁴³ Tib: rid pa. Ch1, 2: 醜陋. Ch3: 惡色. TSDS: kṛśa, kṣāma, chāta, durbala.

⁴⁴ Tib: 'chi ba'i chos can (*maraṇadharmin). Ch1: 法應當死. Ch2, 3: 垂死.

⁴⁵ Tib: ser sna can (*mātsarya). Ch1: 慳貪嫉妬. Ch2: 慳貪. Ch3: 嫉妬等種種苦惱諸有慳貪.

⁴⁶ Tib 訳のみ.

⁴⁷ Tib: 'jungs pa. Mvy 2485: kadaryaḥ, 'jungs po. BHSD kadarya: adj. (Skt. stingy and so Pali kadariya), perh. evil, wicked (of persons). Ch1, 2, 3: 瞋恚.

⁴⁸ 3 漢訳のみ.

⁴⁹ Tib: 'chal ba'i shes rab can (daṣṣprajña). Ch1: 惡智. Ch2, 3: 無慧.

⁵⁰ Ch2 はこの語を欠く。

⁵¹ Tib 訳のみ.

⁵² Ch1: 無有結恨亦無熱惱. Ch2: 憂愁懷恨等之所惱. Ch3: 憂愁患等.

得た。

仏陀の前にいる菩薩の集会，声聞の集会，神々，ナーガ（龍），ヤクシャ（夜叉），ガンダルヴァ（乾闥婆），アスラ（阿修羅），ガルダ，キンナラ，マホーラガ，人間（人）や人間でないもの（非人），比丘，比丘尼，在家の男女の信者（優婆塞・優婆夷）の集会は，すべて，同じ色に，つまり，黄金の色のようには見えたと。すべての者は，同じ色に，つまり，如来の色・特徴・お姿を保持しているかのように見えた。⁵⁵→すべての者は，〔仏陀のように頭〕頂を見られることなく⁵³，身体はすぐれたお姿に見えた。すべての者は，蓮華座に坐り，宝網に覆われて見えた。彼らはすべて，具体的には，〔互いの姿を見ることが〕仏陀にまみえることと本質的にまったく同じように見えた⁵⁴。
←⁵⁵ 彼らにはすべて，具体的には，「歡喜の確立という三昧⁵⁶」を得た菩薩のように，同じような幸せな気持ちが生じた。

(XII-3)

その時，彼らすべての集会〔の人々〕は，不思議な気持ちになった。お互いに違いが無く，教主（仏陀）をすぐれているとも考えず，自分が劣っているとも考えなかった。それらの光が放たれるや，下の方から4人の菩薩が出現した⁵⁷。〔P54a〕⁶²→4人とは誰かというとき，すなわち，プラニダーナサムツダガタ（*Pṛaṇidhānasamudgata 誓願によって高まった（涌出した）⁵⁸），ヴィシェジャバドラ（*Viśeṣābhadrā すぐれて賢明な人⁵⁹），ジュニャーナチャンドラ（*Jñānacandra 知の月⁶⁰）という菩薩摩訶薩であり，もう一人はアパラージタドフヴァジャ（*Aparājitadhvaḥ 無敵の旗印）⁶¹という菩薩摩訶薩である。←⁶² 彼らは合掌し，「挨拶すべき本当の如来はこの集まりの中でどなたなのだろうか」と思いながら，敬意を表して坐っていた。

彼らは空中から「このように，この集会〔の人々〕は，すべて，具体的には，如来の色のようになり，同一の色のように見えるが，〔それは〕法王子であるジャーリニープラバのすぐれた特性（*viśeṣa）である」という声を聞いた。

(XII-4)

その時，4人の菩薩はこう言った。「もし，真実と真実のことばによって（*satyena satyavaca-

⁵³ Ch1:無見頂相. Ch2:有三十二相八十隨形好, 無見頂者. Ch3 はこの語を欠く.

⁵⁴ Tib:sangs rgyas mthong ba'i rang bzhin du rang bzhin gcig tu snang ngo. Ch1:一切悉等而無差別. 現自然身如佛無異. Ch2:等無差別.

⁵⁵ Ch3 はこの部分を欠く.

⁵⁶ Tib:dga' ba'i mam par bkod pa'i ting nge 'dzin (*pṛitivyavasthānasamādhi). Ch1:三昧名興歡豫. Ch2:發喜莊嚴三昧. Ch3:喜樂食發起莊嚴三昧.

⁵⁷ Tib:byung ste. Ch1:自然踊出. Ch2, 3:從地踊 (涌) 出.

⁵⁸ Tib: smon lam yang dag 'phags. Ch3:願力起. 『ラリタヴィスタラ』では菩薩(前生の積尊)を形容する言葉として用いられている. LV :pṛaṇidhānasamudgata(7.3), Tib:smoṅ lam gyis yang dag par 'phags pa (D 5b5).

⁵⁹ Tib:khyad par bzang. Ch3:勝賢.

⁶⁰ Tib: ye shes zla ba. Ch3:智月光. Cf. LV :「悟りの座においてその知が月のように昇るという点で，菩薩は月である」 candrabhūtā bodhisattvāḥ bodhimaṇḍajñānacandrodāgamanatayā(60.14).

⁶¹ Tib:mi thub rgyal mtshan. Ch3:不可降伏. 『入法界品』ではある優れた菩薩の名として出る. Gv : aparājitadhvaḥ(88.15).

⁶² Ch1, Ch2 はこの部分を欠く.

nenā)⁶³、この集会〔の人々〕が同じ色と形をしていて違いがないように、一切法にもまた違いはないのであるならば、その同じ真実と真実のことばによって、シャークヤ・ムニ世尊における種々のすぐれた違いを見て如来に供養できるように、〔如来と人々との〕違いがわずかでも見えるようになりますように」⁶⁶→〔4人の菩薩が〕こう言うと、その時、その瞬間、世尊は、蓮華の中の獅子座⁶⁴とともにターラ樹の高さまで上昇した⁶⁵。←⁶⁶

⁶⁸→ その時、彼ら4人の菩薩は、世尊の両足を頭にいただいて敬礼し、次の言葉を語った。⁶⁷

「世尊よ、如来がたの如来知(*tathāgatājñāna)は不可思議です。このように衆生に楽〔を与える光〕を示した点で、ジャーリニープラバ菩薩の福德と誓願も不可思議です」←⁶⁸

(XII-5)

その時、世尊は、法王子であるジャーリニープラバにこう仰せになられた。

「良家の子よ、おまえは仏がなすべきことをなした。おまえは無量の衆生を悟りへと導いたのであるから、その神通力をおさめなさい」[P54b]

その時、法王子であるジャーリニープラバは、それらの光をおさめた。その光がおさまるや、その集会のすべての者は以前のすがた・様子(*īryāpatha)の通りになった。世尊もまたもとのように蓮華に包まれた獅子座に坐って見えた。

(XII-6)

その時、長老マハーカーシャパ(Mahākāśyapa, M)は世尊にこう申し上げた。「世尊よ、これら4人の菩薩たちはどこから来たのですか」

4人の菩薩が言った。「我々は下方の世界からやって来ました」

〔Mが〕言う。「その世界の名は何ですか」

〔菩薩たちが〕言う。「その世界は、『あらゆる宝石を見せる(*sarvaratnasamdarśana)』と言います」

〔Mが〕言う。「そこでは、どのようなお名前の如来が法を説いておられますか」

〔菩薩たちが〕言う。「その」如来のお名前は、「一つの宝傘蓋(*ekaratnacchatra)」⁶⁹と言います」

⁶³ Cf. SP: 「如来を供養するために自ら私(一切衆生喜見菩薩摩訶薩)の腕を喜捨するならば、真実によって、真実のことばによって、私の身体は金色になるであろう。その同じ真実によって、真実のことばによって、私の腕はもどおりになれ」 yena satyena satyavacanena svaṃ mama bāhuṃ tathāgatapūjākarmaṇe parityajya suvarṇavarṇo me kāyo bhaviṣyati, tena satyena satyavacanenāyaṃ mama bāhur yathā paurāṇo bhavatu (413.8-9). ヒンドゥー教・仏教における satya, satyavacana の意味・用例については宮元 [2004] 47-80 頁参照。

⁶⁴ Tib: seng ge'i khri pad ma can. Ch1:蓮華交露師子之座. Ch2:蓮華寶師子座. Cf. SP: 「彼はそこにおいて蓮華に包まれた師子座に坐って再生するであろう」 sa tasyāṃ padmagarbhe śiṃhāsane(Tib:pad ma'i seng ge'i khri la) niṣaṇṇa upapatsyate. (419.4-5)

⁶⁵ Cf. SP: 「そのとき、〔一切衆生喜見菩薩摩訶薩は〕空中にターラ樹の7倍の高さまで上昇し……」 tasyāṃ velāyāṃ saptatālamātraṃ vaihāyasam abhyudgamyā....(409.8-9)

⁶⁶ Ch3はこの部分を欠く。

⁶⁷ 経典に見られる定型的表現。 Cf. VKN: sa ca bhagavataḥ pādau śirasā vanditvaivam āha (ch.9, sec.5).

⁶⁸ Ch3はこの部分を次の XII-5 の最後に置く。

⁶⁹ Cf: 『首楞嚴三昧経』: 「この〔浄月藏〕天子は四百四十万劫たつと『あらゆる宝石で飾られた(Tib: rin po che thams cad kyis spras pa)』という名の仏国土において、『一つの宝傘蓋(Tib: rin po che'i gdugs gcig pa)』という名の仏陀となるであろう」今は天子過四百四十万劫、當得作佛號一寶蓋、國名一切衆寶莊嚴。(Taisho Vol.15 642a19-21, Tib:P

〔Mが〕言う。「その世界はここからどれだけの所にありますか」

〔菩薩たちが〕言う。「世尊がご存知です」

〔Mが〕言う。「あなたたちは、ここにどういうことで来られたのですか」

〔菩薩たちが〕言う。「ジャーリニープラバ菩薩が光を放って、その光に我々は触れました。触れるや、シャークヤ・ムニ世尊のお名前とジャーリニープラバ菩薩の名を聞きました。世尊とこの正しき人⁷⁰にお会いし、礼拝し、お仕えるために、我々はここにやって来ました」

その時、長老マハーカーシャパは世尊にこう申し上げた。「世尊よ、『あらゆる宝石を見せる』という世界である、『一つの宝傘蓋』という如来・世尊のその仏国土は、どれだけ離れた所にあるのですか」

世尊が仰せになる。「これら4人の菩薩がやってきた『あらゆる宝石を見せる』という世界である [P55a], 『一つの宝の天蓋』という如来・世尊の仏国土は、この世界から下方にガンガー河の砂に等しい〔数の〕72倍の仏国土を過ぎたところにある」

〔Mが〕申し上げる。「彼らはそこからどれだけ〔の時間〕でここに来ましたか」

〔世尊が〕仰せになる。「心の一刹那の間に (*ekacittakṣaṇena), そこから姿を消してここにやって来た」

〔Mが〕申し上げる。「世尊よ、このように、ジャーリニープラバ菩薩の光の輝きがそこまで届き、これらの良家の子たちがそのように、すみやかにやって来ました。⁷¹菩薩たちの光の放射と神通力は未曾有のものです^{←71}」

〔世尊が〕仰せになる。「カーシャパよ、その通りだ。〔お前の〕言った通りだ。一切の声聞・独覚のあずかり知らない⁷²菩薩たちの行いは不可思議である」

(XIII)

その時、具寿マハーカーシャパは、法王子であるジャーリニープラバにこう言った。「良家の子よ、汝の光がこれらの集会〔の人々〕に触れると、同じ色つまり金色になりましたが、これは何の力(威神力)なのですか」

〔Jが〕言う。「マハーカーシャパよ、世尊にこそ汝は問いなさい。〔世尊は〕それを汝に説いて下さるでしょう」

そこで具寿マハーカーシャパは世尊にこう申し上げた。「世尊よ、この瑞相 (*pūrvanimitta) の出現は何の〔ための〕ものですか⁷³」

世尊が言う。「カーシャパよ、ジャーリニープラバが悟りを得た〔時の〕集会〔の人々〕は、同一の色、つまり金色になるであろう。集会〔の人々〕は同じものを信解する、つまり、一切知者

327a3-4) VKN: 「それら〔五百の〕宝傘蓋が捧げられるや、まず、ブッダの威神力によって一つの大きな宝傘蓋 (ekaratnacchatra) とされた。その大宝傘蓋によって、三千大千世界がすべて覆われて見えた」 (ch.1, sec.8) なお、『華手経』(Taisho No.657, Otani No.769)では、東方の「一宝巖 (*Ekaratnavyūha)」如来の「一宝蓋 (*Ekacchatra)」世界に成仏の授記を受けたジャーリニープラバ菩薩がおり、シャークヤ・ムニの光を受けてサハ世界を訪れるが、この設定はBPの結構を利用して作られたものであろう。詳細は五島 [1988] 参照。

⁷⁰ Tib:skyes bu dam pa(*satpuruṣa). Ch1:正士明網菩薩. Ch2,3:網明上人.

⁷¹ Ch1:其誰見是神足威變智慧所爲而不顧樂建立大乘. Ch2,3 はこの部分を欠く.

⁷² Tib: gang nyan thos dang rang sangs rgyas thams cad kyiis ma yin pa. Ch1:聲聞緣覺所不能及. Ch2, 3: 一切聲聞辟支佛(等)所不能及.

⁷³ 経典に見られる定型的表現. Cf. SP : kasya khalv idaṃ pūrvanimittaṃ bhaviṣyati. (171.8)

の心⁷⁴を信解するであろう。そこには声聞や独覚という名さえないであろう。菩薩摩訶薩ばかりの集団(僧伽)⁷⁵となるであろう」

マハーカーシャパが申し上げる。「世尊よ、その仏国土に生まれる菩薩は如来であるとみなすべきです」

世尊が [P55b] 仰せになる。「カーシャパよ、〔汝の〕言う通りである。彼は如来に他ならないと理解すべきである」

その時、その集会の中の4万4千の生き物(*prāṇin)が、無上正等覚に心を起こして、かの仏国土に対して誓願をたてて「世尊よ、ジャーリニープラバ菩薩が悟りに至った時に、私たちはその仏国土に生まれますように」と言った。

(XIV-1)

その時、長老マハーカーシャパは世尊にこう申し上げた。「世尊よ、ジャーリニープラバ菩薩はどれほどたったら、無上正等覚を悟るのでしょうか」

世尊が仰せになる。「カーシャパよ、汝はどのように、ジャーリニープラバ菩薩に『良家の子よ、汝はどれほどして無上正等覚を悟るのか』と問いなさい」

そこで、長老マハーカーシャパはジャーリニープラバ菩薩にこう言った。「良家の子よ、あなたはどれほどして無上正等覚を悟るのでしょうか⁷⁶」

ジャーリニープラバが言う。「大徳マハーカーシャパよ、幻術によって化作された人に『良家の子よ、汝はどれほどして無上正等覚を悟るのですか』と質問したら、その人はどのように答えるのでしょうか」

[Mが]言う。「良家の子よ、幻術によって化作された人には、本当の完成などないのですから、彼がどんなことを答えられましょうか」

[Jが]言う。「大徳マハーカーシャパよ、その通りです。幻術によって化作されたものと同じように、一切法も完成していない⁷⁷のですから、いったい誰に向かって、『汝はどれほどしたら無上正等 [P56a] 覚を悟るのか』と問うのでしょうか」

[Mが]言う。「良家の子よ、幻によって化作されたものは⁷⁸→〔あらゆるものから〕遠離(*viveka)しており、変化(*vikāra)もなく、判断(*parikalpa)もなく、行為の主体(*kāraṇa)であることもありません⁷⁸が、あなたが、もしそのようであるならば、無量の人々のためにいった

⁷⁴ Tib: thams cad mkhyen pa'i sems (*sarvajñacitta). Ch1: 達諸通慧. Ch2, 3: 一切智慧.

⁷⁵ Tib: byang chub sems dpa' sems pa' chen po sha stag gi dge 'dun. Ch1: 純諸菩薩大士之衆. Ch2: 唯有清淨諸菩薩摩訶薩會. Ch3: 唯有清淨諸菩薩摩訶薩衆. TCD: sha stag, 'ba' zhiḡ gam kho na, 全, 都, 純屬. Cf. Krp: 『『すぐれた蓮華』という名の如来……となるであろう、無量の菩薩だけの集団を伴って』 padmottaraś ca nāma tathāgato bhaviṣyati aprameyena śuddhena bodhisattvasaṅghena (Tib: byang chub sems dpa' 'ba' zhiḡ gi dge 'dun). (139.1-3)

⁷⁶ Cf. Gv: 「善財が言う。聖者(アーシャー優婆夷)よ、あなたはどれくらいかかって無上正等覚を悟るのでしょうか」 sudhana āha: kiyaccireṇa ārye tvam anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambhotsyase. (82.20)

VKN: 「〔シャーリプトラが〕言う。天女よ、あなたはどれくらいかかって悟りを証得するのでしょうか」 āha: kiyaccireṇa punar devate bodhim abhisambhotsyase. (ch.6, sec.16)

⁷⁷ 五島 [2010]119頁33行参照。また、註94参照。

⁷⁸ Ch1: 寂漠不可分別、無有想念亦無言辭. Ch2, 3: 離於自相、無異無別無所志願. Cf. Asp 「世尊よ、例えば幻術〔で作り出された〕人は、『幻術者は私の近くにいるが、他の〔見物の〕人の群れは私から離れている』とは考えません。なぜなら、世尊よ、幻の人には分別がないからです。……世尊よ、例えば完全な覚りを得た如来が神通力で作り出した化人は、『声聞の階位や独覚の階位は私にとって遠く、無上正等覚は私にとって近い』とは考えません。なぜなら、世尊よ、神

いどんな利益をなすのですか」

〔J が〕 言う。「大徳マハーカーシャパよ、⁷⁹ 幻の本性は悟りの本性なのです。悟りの本性は衆生の本性なのです。幻と悟りと衆生の本性は、すべての法の本性なのです ←⁷⁹。大徳マハーカーシャパよ、私は、いかなる点においても、利益(意味)の有無を見ることはありません」

(XIV-2)

〔M が〕 言う。「良家の子よ、あなたは仏になろうと行動を起こさないのですか⁸⁰」

〔J が〕 言う。「大徳マハーカーシャパよ、いったい、如来がたの悟りに、行動を起こす (*pravṛtti) という特質があるのでしょうか⁸¹」

〔M が〕 言う。「そういうことはありません」

〔J が〕 言う。「それゆえ、私は、仏陀になるため、声聞になるため、独覚になるために、行動をおこすことはしないのです⁸²」

〔M が〕 言う。「良家の子よ、あなたは何に向かって行動を起こすのですか」

〔J が〕 言う。「真如が働く (*pravṛtti) とところに向かって私は行動を起こします」

〔M が〕 言う。「良家の子よ、真如は、働くこと (*pravṛtti) もなければ退くこと (*nivṛtti) もありません」

〔J が〕 言う。「大徳マハーカーシャパよ、真如には働くことも退くこともないように、一切の法は、真如の状態にある⁸³ ので、働くこともなく退くこともありません」

〔M が〕 言う。「ジャーリニープラバよ、もしあなたが、働く(行動を起こす)こともなく退くこともないのであれば、どのようにして衆生を成熟させるのでしょうか」

〔J が〕 言う。「大徳マハーカーシャパよ、誓願を立てる人々は、衆生を成熟させることに努力することはありません。いかなる法からも退くことのない人々⁸⁴ は、衆生を成熟させることに努力することはありません」

〔M が〕 言う。「良家の子よ、あなたは、衆生を輪廻から退かせないのでしょうか」

〔J が〕 言う。「私は輪廻を認識の対象 (*ālabana) としないのですから、[P56b] どうして衆生

通力で作り出された人には分別がないからです。……世尊よ、例えば、ある仕事のために神通力で作り出された化人は、その仕事を行います、その化人には〔自分はその行為をしているという〕分別はありません」tadyathāpi nāma bhagavan māyāpuruṣasya naivaṃ bhavati, māyākāro mamāsannaḥ, yaḥ punar anyo janakāyaḥ saṃnipatitaḥ sa mama dūra iti. tat kasya hetoḥ. avikalpatvād bhagavan māyāpuruṣasya tadyathāpi nāma bhagavaṃs tathāgatenārhatā samyaksambuddhena yo nirmītakō nirmītaḥ, na tasyaivaṃ bhavati, śrāvakabhūmiḥ pratyekabuddhabhūmiś ca mama dūre, anuttarā samyaksambodhir mamāsanneti. tat kasya hetoḥ. avikalpatvād bhagavan nirmītasya tadyathāpi nāma bhagavan sa nirmītakō yasya kṛtyasya kṛtaśo nirmītaḥ, tat kṛtyaṃ karoti, sa ca nirmītakō 'vīkalpaḥ. (218.16-219.5)

⁷⁹ 漢訳における等置の順は次の通り。Ch1:道自然=人自然=幻自然=衆生自然=諸法自然。Ch2, 3:阿耨多羅三藐三菩提=一切衆生性=幻性=一切法性。

⁸⁰ Tib:khyod sangs rgyas su 'gyur bar ma zhugs sam. Ch1:不立衆生於佛道乎。Ch2:汝今不令衆生住菩提耶。Ch3:仁今豈可不令衆生住菩提耶。

⁸¹ Tib: ci de bzhin gshegs pa rnam kyī byang chub 'jug pa'i mtshan nyid dam. Ch1:如来之道有立想乎。Ch2, 3:諸佛菩提有住相耶。Cf. *Lank* 18.5: pravṛtilakṣaṇa ('jug pa'i mtshan nyid).

⁸² Ch1:吾不建立衆生之類於佛道也。Ch2, 3:我不令衆生住於菩提, (我) 亦不令住 (於) 聲聞辟支佛道。

⁸³ Tib: de bzhin nyid kyī 'jug par zhugs pa. Ch1:猶如無本。Ch2, 3:住如相。

⁸⁴ Tib: gang chos gang las kyang mi ldog pa de dag. Ch1:其於諸法有退還者。Ch2, 3:若人於法有轉。

を輪廻から退かせることがありましようか」

〔Mが〕言う。「良家の子よ、あなたは衆生を涅槃へ入らせ (*avatāraṇa) ないのですか」

〔Jが〕言う。「私は涅槃を見ないので、どうして衆生にそれを得させるのでしょうか」

〔Mが〕言う。「良家の子よ、では (*atha), この場合、涅槃もなく輪廻もないのですから、どうして菩薩は衆生を涅槃させるために悟りに向けて修行したりするのでしょうか」

〔Jが〕言う。「大徳マハーカーシャパよ、もし輪廻を認識の対象とし、涅槃を分別し、衆生の想い(救済の対象となる人は実在するという考え)に住して、悟りへと修行するのであれば、そのような人々は、菩薩とは言えません」

〔Mが〕言う。「良家の子よ、汝はどこにおいて行じる(行動する、修行する)のですか」

〔Jが〕言う。「大徳マハーカーシャパよ、私は、輪廻、涅槃、衆生想において行じるわけではありませんが、『あなたはどこにおいて行じますか』と質問するのであれば、大徳マハーカーシャパよ、わたしは、如来によって化作されたもの (*tathāgatanirmita) が行じている、その同じところで行じる〔と答えましよう〕」

〔Mが〕言う。「良家の子よ、如来によって化作されたものはどこにおいても行じることはありません」

〔Jが〕言う。「大徳マハーカーシャパよ、すべての衆生の行(行動、修行)の特徴もまたそうだと見るべきです」

(XIV-3)

〔Mが〕言う。「良家の子よ、では、すべての衆生の行の特徴がそのようであるならば、如来によって化作されたものたちは、執着することなく怒ることなく愚かでもないのですから、どうして衆生に、執着・怒り・愚かさが生じましようか」

〔Jが〕言う。「⁸⁵ それならば、長老にこのことを質問しましょう。あなたは思う通りにこのことに答えてください。←⁸⁵ 長老マハーカーシャパに、現在そのような執着・怒り・愚かさがありますか」

〔Mが〕言う。「そういうことはありません」

〔Jが〕言う。「それではあなたの執着・怒り・愚かさは尽きたのですか、無くなったのですか」

〔Mが〕言う。「そういうことはありません」 [P57a]

〔Jが〕言う。「もし、長老に執着・怒り・愚かさがなく、尽きることも無くなることもないのであれば、あなたにとって執着・怒り・愚かさはそもそも存在しているのでしょうか⁸⁶」

〔Mが〕言う。「良家の子よ、顛倒をもった愚かな凡夫たちは、想像 (*kalpa)・分別 (*vikalpa)・判断 (*parikalpa) に住しているがゆえに、執着・怒り・愚かさが生じますが、⁸⁷→ 聖〔人たちの〕法と律 (*āryadharmavinaya) においては、顛倒〔というものの真実のすがた〕を理解しているので←⁸⁷、想像・分別・判断が生じることはなく、そこには、執着もなく、怒りもなく、愚かさも

⁸⁵ 経典に見られる定型的表現。 Cf. *Asp*: tena hi kauśika tvām evātra pratiprakṣyāmi, yathā te kṣamate tathā vyākuryāḥ (29.5-6); 橋尸迦我還問汝，隨意答我 (Taisho Vol.8 546a5-6). *DN*: tena hi rājañña taṃ yev' etha paṭipucchissāmi, yathā te khameyya tathā naṃ vyākareyyāsi (vol.2, 321.6-7); 吾今問汝，隨意答我 (Taisho Vol.1 45a3-4). *BHSD* kṣamati, (3) impersonally, *seems good, pleases*: yathā te kṣamate, *as seems good to you, as you think best*.

⁸⁶ Ch1: 其姪怒癡徒著何所。 Ch2, 3: 汝置貪患癡於何所耶。

⁸⁷ Tib: 'phags pa'i chos 'dul ba la ni phyin ci log khong du chud pas. Ch1: 諸賢聖則以法律覺了顛倒。 Ch2, 3: 賢聖法中善知顛倒之實性故。 āryadharmavinaya については、『一万八千頌般若経』に次のような説明がある。

ありません」

〔Jが〕言う。「大徳マハーカーシャパよ、このことをどう思いますか。⁸⁸ 顛倒から生じる煩惱は真実に存在するものでしょうか^{←88}」

〔Mが〕言う。「⁸⁹ そうではありません。それは真実に存在するものではありません^{←89}」

〔Jが〕言う。「⁹⁰ 大徳マハーカーシャパよ、このことをどう思いますか。^{←90 91} 真実に存在しないものが、いったい真実となりえましょうか^{←91}」

〔Mが〕言う。「そういうことはありません」

〔Jが〕言う。「⁹² 長老よ、およそ真実でないものから、執着・怒り・愚かさが生じると主張するのですか^{←92}」

〔Mが〕言う。「そういうことはありません⁹³」

〔Jが〕言う。「大徳マハーカーシャパよ、もしそうであるなら、衆生が汚される (*saṃkṣiṣṭa) ことになる執着・怒り・愚かさとは何なのでしょう」

〔Mが〕言う。「良家の子よ、そうであるなら、すべての法は本性として執着を離れ、怒りを離れ、愚かさを離れています」

スプーティが言う。「世尊よ、『聖なる法と律』、『聖なる法と律』と言いますが、世尊よ、どれだけの範囲が、聖なる法と律でしょうか」世尊が言う。「この場合、スプーティよ、声聞、独覚、菩薩・摩訶薩、如来・応供・正等覚は、執着・怒り・愚かさとは結びついていないし、離れてもいない。……初禪ないし第四禪とも結びついていないし、離れてもいない。……四念処ないし大慈・大悲、有為界・無為界とも結びついていないし、離れてもいないからである。それ故、『聖なる(人々)』と言われるのである。彼ら(聖賢たち)にとって、これが法と律である。それ故、『聖なる法と律』と言うのである」

āha: (āryo dharma)vinayo āryo dharmavinaya iti bhagavann ucyate. kiyatā bhagavann āryo dharmavinaya ity ucyate? bhagavān āha: iha subhūte śrāva)kāḥ pratyekabuddhā bodhisattvā mahāsattvās (ca) tathāgatā (arhantaḥ) samyaksambuddhā rāgeṇa na saṃyuktā na viśaṃyuktāḥ (doṣeṇa na saṃyuktā na viśaṃyuktāḥ mohena na saṃyuktā na viśaṃyuktāḥ) prathamena dhyāneṇa na saṃyuktā na viśaṃyuktāḥ yāvat caturthena dhyāneṇa na saṃyuktā na viśaṃyuktāḥ (catur)bhīḥ smṛtyupasthānair na saṃyuktā(→-tā) na viśaṃyuktāḥ yāvan mahāmaityā mahākaraṇayā na saṃyuktā na viśaṃyuktāḥ, saṃskṛta(dhātunā na saṃyuktā na viśaṃyuktāḥ) asaṃskṛtadhātunā na saṃyuktā na viśaṃyuktā) iti. (te)na te āryā ity ucyante. teṣāṃ cāyaṃ dharmo vinayaś ca, tasmād āryo dharmavinaya ity ucyate. (*Adsp1* 188.8-189.3)

⁸⁸ Tib: gang phyin ci log las byung ba'i nyon mongs pa de yang dag pa yin nam. Ch1:其處顛倒而生諸法從致法耶。因有所生爲無所生 Ch2, 3:若法從顛倒起, 是法爲實爲虛妄耶。 yang dag pa(*bhūta) は「正しい, 真実である」の意であるが、前後の文脈から「真実であるもの, 真実に存在するもの(真実在)」の意で訳しておく。なお、次註および五島 [2010]101-102 頁(註 67) 参照。

⁸⁹ Tib: de ma yin te, de ni yang dag pa ma yin no. Ch1:其不有生則無所生。 Ch2. 3:是法虛妄非是實也。 Cf:VKV 「この身体は〔四大〕要素の居宅であり、実在しない」 asambhūto 'yaṃ kāyo mahābhūtānām ālayaḥ (Tib:lus 'di ni 'byung ba chen po rnam kyī gnas te yang dag pa ma yin pa'o). (ch.2, sec.11)

⁹⁰ Ch2,3 はこの部分を欠く。

⁹¹ Tib: gang yang dag pa ma yin pa de nam yang yang dag par 'gyur ram. Ch1:其不有生無所有者寧有所生乎。 Ch2.3:若法非實可令實耶。

⁹² Tib: gnas brtan yang dag pa ma yin pa gang [yin pa'i yang dag pa ma] yin pa de las 'dod chags dang zhe sdang dang gū mug skye bar 'dod dam. [] 内を Ph のみが欠いているが、この Ph の読みにしたがう。 Ch1:唯, 大迦葉, 其不有生欲令生者於何所。 Ch2:若法非實, 仁者, 欲於是中得貪患癡耶。 Ch3:若法非實, 汝大迦葉, 於中欲得貪患癡耶。文末の 'dod (*icchatī) の語義については、辛嶋 [2006] 参照。

⁹³ Ch1 のみここに以下の一対の問答を加える:又問。耆年, 爲求所生緣是致生姪怒癡乎。報曰。不然。

〔Jが〕言う。「大徳マハーカーシャパよ、〔私は〕このことを考えて、このように、『すべての法は幻術によって作り出された(化作された)という本性を持つ』⁹⁴と云ったのです」

この教説を説かれたとき、4万4千の菩薩が、随順忍⁹⁵を生じた。

(XV-1)

その時、具寿マハーカーシャパは、世尊にこう申し上げた。「世尊よ、[P57b]〔自らの〕眼でジャーリニープラバ菩薩の光を見る人々には、苦界・悪趣〔などと呼ばれる悪しき生存状態〕に陥る(*apāyadurgativinipāta) 恐怖⁹⁶を〔自ら〕求めるようなことはしないでしよう⁹⁷。この法の教説を聞く人々には、魔の仕業(*māra karman)に邪魔されることを〔自ら〕求めるようなことはしないでしよう。彼が悟りへと成熟させる人々は、声聞や独覚の地を〔自ら〕求めるようなことはしないでしよう。⁹⁸ 世尊よ、ジャーリニープラバ菩薩の仏国土の功德の莊嚴(*buddhakṣetraguṇavyūha⁹⁹)を説いてください」

世尊が仰せになる。「カーシャパよ、ジャーリニープラバ菩薩は、どこであれ自分が住するそれぞれの仏国土において数限りない人々に利益を与える。カーシャパよ、この良家の子が光を放ったのを見たか」

〔マハーカーシャパが〕申し上げる。「世尊よ、私は見ました」

世尊が言う。「¹⁰⁰カーシャパよ、三千大千世界が芥子粒で満たされたとして、〔その芥子粒の数を〕計算によって数え尽くすことはできるが、カーシャパよ、ジャーリニープラバ菩薩がこの光¹⁰⁰を示すことによって無上正等覚に決定された人々の〔数を〕数え尽くすことはできない。

⁹⁴ Tib: chos thams cad ni sgyu mas sprul pa'i rang bzhin yin no. Ch1: 一切諸法悉如幻自然之相. Ch2, 3: 一切法相如佛所化. 五島 [2010]119 頁 19-20 行参照. Cf. VKN 「[天女が] 言う. まさにそのように、大徳シャーリプトラよ、すべての法は幻術によって化作されたという本性をもつ完全ではないものなのに、あなたはなぜ『どうしてあなたは女身を転じないのか』とお考えになるのですか」 āha: evam eva bhadanta śāriputra apariniṣpanṇeṣu sarvadharmeṣu māyānirmitasvabhāveṣu kutas tavaivaṃ bhavati: kiṃ tvam strībhāvaṃ na nivartayasīti. (ch.6, sec.14)

⁹⁵ Tib: rjes su 'thun pa'i bzod pa(*anulomikakṣānti). Ch1, 2, 3: 柔順法忍. cf. Sukh: 「それらのすべての人たちは、その菩提樹を見るやいなや、無上正等覚から退転しない者となる。また、三忍つまり音響忍と随順忍と無生法忍とを得る。〔それらの忍は〕かのアミターユス如来が前世に立てた誓願の加持力によって、また、かつて勝者(仏陀)に奉仕したことによって、また、よく成し遂げられよく修習され完全で欠けることのない前世に立てた誓願の実践によって〔得られるのである〕」 sarve ca te sattvāḥ sahadarśanāt tasya bodhivṛkṣasyāvaivartikāḥ samṛtiṣṭhante yad utānuttarāyāḥ samyaksambodhes. tisraś ca kṣāntīḥ pratilabhante, yad idaṃ: ghoṣānugām anulomikām anutpattikadharmakṣāntiṃ ca ; tasyaivāmitāyusaḥ tathāgatasya pūrvaprañidhānādhiṣṭhānena, pūrvajīnakṛtādhikāratayā, pūrvaprañidhānaparicaryayā(Text: -yoś) ca samāptayā subhāvitayānūnāvikalatayā. (48.14-21)

⁹⁶ Tib: ngan song ngan 'gro log par ltung ba'i 'jigs pa. Cf. VKN: 「あらゆる点で苦界・悪趣への陥落という艱難(深い溝)から解放された(菩薩たち)」 sarvāpāyadurgativinipātotsiptaparikhaiḥ (Tib: ngan song gi 'jigs pa dang ngan 'gro log par ltung ba'i 'jigs pa'i 'obs thams cad las brgal bas) . (ch.1, sec.3)

⁹⁷ Tib: 'tshal bar mi bgyi'o.

⁹⁸ Ch3 のみ次の一節を加える. Ch3: 若蒙網明童子菩薩所化教化者, 彼諸衆生於大菩提畢竟不退.

⁹⁹ vyūha は本来は「(軍隊の) 陣容, (文章の) 配列, 集まり, 構造」などの意. vyūha の大乘仏典における意義・用例については村上 [2003] 参照. Cf. BHS: vyūha, in Mahāyāna works (not in Pāli), *arrangement*, but with regular overtones of *marvelous*, *supernatural*, *magical arrangement*, esp. of Buddha-fields.

¹⁰⁰ DHKLT: 'od 'di. CNPPh: 'od. B は写本に脱落がある.

←101

カーシャパよ、ジャーリニープラバ菩薩は光によってさえ人々に利益を与えるのであるから、ましてや、法の教説によって〔人々に利益を与えることは〕言うまでもない。カーシャパよ、この良家の子の仏国土における功德の莊嚴がいかによぐれているかについて少しばかり説くから、聞きなさい。

カーシャパよ、ジャーリニープラバ菩薩は、760万¹⁰²アサンケーヤ(阿僧祇)の劫を過ぎて「優れた功德が集積した(**guṇaviśeṣasaṃgrhīta* 集妙功德)」という世界において、「あらゆる方向に光による遊戯の光線を〔放つ〕王(**samantaprabhāvīkuraśmīrāja* 普光自在王)」という名の如来・応供・正等覚 [P58a] として世に出現する。彼が菩提樹のところ付近になると、その世界のあらん限りの魔や魔の眷属の神々(**māro vā mārakāyikā vā devatāḥ*)は無上正等覚にいたることが決まる(**niyata*)であろう。¹⁰³→〔彼らは〕布施と喜捨を大に行うであろう。←¹⁰³

カーシャパよ、¹⁰⁹→〔その仏国土は地面がすばらしい梅檀でできているであろう〕¹⁰⁴。その世界は手のひらのように平坦であろう。カーチャリンディカの衣¹⁰⁵のように柔らかで¹⁰⁶手触りがよく一切の宝石で飾られているであろう。その世界の中には、〔三〕悪趣がなく、〔八〕難(**akṣaṇa*)がなく、切株やとげ・いばら¹⁰⁷もないであろう。その世界においては、蓮華の莊嚴(**padmavyūha*)¹⁰⁸が生じるであろう。芳香のある大蓮華の宝石が生じるであろう。その世界は

¹⁰¹ Cf. *Mv*: 「もし、三千世界がすべて芥子粒によって満たされたとして、美しき〔頭〕飾りをもつ方よ、賢人がその芥子粒の数を一瞬のうちに数えきめることはできるでしょう。しかし、世尊の〔口から放たれる〕旃檀の香りを捉え知覚する十方にいる無量無辺の人々の数を数えることはできません」 *trisāhasrā sarvā yadi pi lokadhātu pūrā bhavhe śikhāśiri sarśapehi śakyam gaṇetum syāt sarśapā ekamuhūrte vicakṣaṇena na tv eva śakyam gaṇayitum sarvasatvadhātū daśasu diśāsu aparimitā anantā yā hi bhagavato candanasya ghrāyitvā gandham pratilabhe.* (vol.2, 295.9-12)

¹⁰² Ch1:六百七十萬。Ch2, 3:七百六十萬。

¹⁰³ 漢訳はこの部分を欠く。

¹⁰⁴ Ch1, 2のみ。

¹⁰⁵ Tib: *go ka tsa lin di ka* (**kācalindika*). Ch1: Ch2,3 ; 迦陵伽(衣)。Cf. *Mvy* 5879, *BHSD* 175r. 『広説』は「迦旃隣陀: *kācalindika* の音写。実可愛鳥と漢訳。羽毛は細軟で、集めて織ると柔軟な衣服をつくることができる」とする。漢訳資料だが、『無量寿経優婆塞舍願生偈註』には「迦旃隣陀者天竺柔軟草名也。觸之者能生樂受」(Taisho vol. 40 829b6-7)とあり、また、『正法念處経』には「猶如觸於迦旃隣提(割註: 迦旃隣提海中之鳥。觸之大樂。有輪王出此鳥則現)」(Taisho vol.17 176b5-6)とある。Cf. *Mv*: *atha sa mṛdukācalindikapraveṇiye guṇadharam grahetvāna.* (vol.2, 29.13) (Jones: Then taking in his arms the Virtuous One, swathed in delicate and soft gaily-coloured wool,)

¹⁰⁶ BKLPhT: 'jam (**mṛduka*). CDHNP: *mnyam* (**tulya*). Ch1: 其界衆生身體柔軟。Ch2: 柔濡。Ch3: 柔軟。

¹⁰⁷ Tib: *sdong dum dang tsher ma*. Ch1: 沙磧石荆棘之穢。Ch3: 瓦礫荆棘土石等穢。Ch2 はこれらの語を欠く。Cf. *Asp* 「さて、大地の中で、塩分を含み、乾燥し、種類の雑草や切株やとげ・いばらのある場所は比較的多い」 *atha khalu punar bahutarakās te mahāpṛthivyāṃ pṛthivīpradesāḥ, ya uṣarā ujjāṅgalā vividhatṛṇakhāṇḍakaṇṭakādhānāḥ* (212.7-8). Tib: *sa chen po'i sa phyogs gang na ba tshwa can dang grams dang rtswa dang sdong dum dang tsher ma sna tshogs kyis gang ba de lta bu ni ches mang ngo* (D 232a4). *Vaidya* 本は *khāṇḍa* を *kāṇḍa* とするが、*Mitra* 本 *Wogihara* 本により訂正。*BHSD* によれば *khāṇḍa* は *khāṇu*(Skt: *sthāṇu*) と読むべきで、*stump* (as a worthless and impeding element) の意としている (p.204.r). Tib. *sdong dum* は、*TD* によれば、「樹の幹の断片あるいは朽ちた樹根 (*shing sdong gi dum bu'am rtsa ba gog po*)」の意 (p.453.l). *kaṇṭaka*(Tib: *tsher ma*) は *Mvy* 3619 によれば、とげ・いばら等の障害物の意。

¹⁰⁸ Cf. *SP* 「かの如来の法座の前に 840 万コーティ・ナユタもの蓮華が出現した。それらは金の茎と銀の葉をし、パドマやキンシュカの萼でできていた。そのときマンジュシュリー法王子は、その蓮華の莊嚴が現

汚れがなく広大であろう。←¹⁰⁹

また、カーシャパよ、かの「優れた功德が集積した」という世界において、世尊たる「あらゆる方向に光による遊戯の光線を〔放つ〕王」というかの如来には、〔その数〕無限の菩薩の集団(*saṃgha)があり、〔彼らは〕修行としての法のあり方(*pratipattidharmagati)に巧みであり、すぐれた知によって思いのままに活動(神通遊戯*abhijñāvikrīḍita)し、光であまねく〔身を〕飾り、陀羅尼の蔵(*dhāraṇīnidhāna)を得、三昧を得、無礙の弁才と知による説法に巧みであり、¹¹⁰→〔六〕神通・〔三〕明・〔四〕無所畏を得ており、←¹¹⁰ 魔と敵対者を滅ぼし、憶念・判断力・知・慚・愧・智慧に磨きをかける知¹¹¹を完全に修習する〔であろう、そういう〕点で〔彼らの修習する法門は〕無量であろう¹¹²。

また、カーシャパよ、その仏国土では、女性にうまれることはないであろう。彼ら菩薩たちはすべて蓮華の中で結跏趺坐して、自然に生まれる(化生*upapāduka)であろう¹¹³。それらの菩薩たちは、禪定の喜びを食とするであろう¹¹⁴。食べ物・飲み物・乗り物・衣服・経行所(*caṅkrama)・園林(*udyāna)・楼閣(*kūṭāgāra)・[P58b]¹¹⁵→河川・泉・湖・蓮池・ため池←¹¹⁵などの、あらゆる享受すべき物¹¹⁶が、考えるだけで現れるであろう¹¹⁷。

れたのを見て……」 tasya tathāgatadharmāsanasya purastāc caturaṣṭīpadmakōṭīnayutaśatasahasraṇī prādurbhūtāny abhūvan suvarṇadaṇḍāni rūpyapatrāṇī padmakīṃśukavarṇāni(→ -garbhāni) saṃdrśyante sma / atha khalu mañjuśrīḥ kumārabhūtas taṃ padmavyūhaprādurbhāvaṃ drśtvā (426.-13)

¹⁰⁹ Cf. *Krp* 「アクションブヤ(阿闍)が言う。大徳・世尊よ、私は、次にあげるような仏国土の功德の莊嚴を希望します。つまり、大地はその世界全体が黄金であり、平坦であること手のひらのようであり、神々しいマニの宝によって散りばめられ、小石や砂利がなく、岩・障害物・(重しになりそうな大きな)石・山などはなく、柔らかでその感触はカーチャリンディカのようにこちよく、足をおろしたときはへこみ、足をあげれば再びもどりますように。また、ここには、地獄・畜生・ヤマの世界・餓鬼の領域は知られることはありませんように」 akṣobhya āha / tādrśam ahaṃ bhadanta bhagavan buddhakṣetraguṇavyūham ākāṅkṣāmi yathā sarvalokasuvarṇabhūr bhavet, samā pāṇītalopamā divyamaṇiratnavavakīrṇā apagataśarkarakatḥallā apagataśīlāstambhapāṣāṇaparvatā mṛdukā kācalindikasukhasaṃsparśā, niḥśipte pādātale 'vanamed utkṣipte pādātale punar unnamet / na cātra narakatiryagyoniyaamalokapretaviṣayāṃ prajñāyeyuḥ / (165.15-166.1)

¹¹⁰ Ch1:獲大神通。Ch2:光明神力皆悉通達。Ch3:光明神力無不通達。悉得諸通無畏辯才。

¹¹¹ Tib: shes rab sbyangs pa'i ye shes (*prajñōtāpanajñāna). Cf. 五島 [2009] 162 頁註 109, 110.

¹¹² Ch2, 3:善修無量法門。

¹¹³ Cf. *SP*: 「この仏国土には苦界もなく女性もないであろう。すべての人々は自然に生れる者であろう」 idam buddhakṣetram apagatāpāyam bhaviṣyati apagatamātrgrāmaṃ ca. sarve ca te sattvā aupapādukā bhaviṣyanti. (202.4-5) *Sukh*: 「さらにまた、世尊よ、ここには自然に生まれるというかたちで蓮華の上に結跏した状態で出現するものがあります」 santi khalu punar atra bhagavan sattvā ya [a]lupapādukāḥ padmeṣu paryaṅkaiḥ prādurbhavanti. (57.18-19)

¹¹⁴ Cf. *VKN*: sadā ca dhyānāhāraḥ (Tib: rtag tu bsam gtan gyi dga' ba'i zas za ba). (ch.2 sec.3)

¹¹⁵ Tib: 'bab chu dang chu mig dang mtsho dang rdzing dang lteng ka. Cf. *LV*: 「河・泉・湖・ため池・海・泉水・蓮池・井戸」 nady-utsasaro-hrada-tāgā-sāgara-sarāhpālvala-puṣkarīṇī-kūpa- (183.13) Tib: klung dang chu mig dang mtsho dang mtshe'u dang rdzing dang dang rgya mtsho dang lteng ka dang khron pa dang rdzing bu dand (D 123b3)

¹¹⁶ Tib: yongs su longs spyod (*paribhoga). Ch2, 3:諸所須物。 Cf. *Sukh*: vastrābharaṇodyānavimāna-kūṭāgāraparibhoga.(37.9-10)

¹¹⁷ Cf. *Asp*: 「三十三天の神々のところには、考えるだけで何でも生じてくる」 devānāṃ trāyastriṃśānāṃ manasaiva(Tib:

カーシャパよ、「あらゆる方向に光明の遊戯の光線をもつ王」というかの如来・応供・正等覺は、文字と語源解釈 (*nirukti) によって法を説くことはない。そうではなくて、彼ら菩薩たちは、かの如来の光に触れるや、無生法忍をそれぞれ得るであろう。その光は、何の障害もなく、他の諸々の仏国土に届くであろう。その光は人々の煩惱を清め、〔人々は〕煩惱から離れるであろう。

(XV-2)

また、マハーカーシャパよ、かの如来の光から、法のあり方 (*dharmanaya) を分析的に示す (*prabheda) ¹¹⁸ 32 の声が見れるであろう。32 とは何かというと、〔以下の通りである。〕

- (1) 〔間違った〕見解 (*dr̥ṣṭigata) が浄化されているので、一切諸法は、空である。
- (2) 想像・分別 (*kalpa-vikalpa) を離れているので、一切諸法は、無相である。
- (3) 三界から出離している所以、一切諸法は、無願である。
- (4) 本性として寂静である (*upaśānta)¹¹⁹ のので、一切諸法は、執着(貪欲)を離れている。
- (5) 願うことがないという特徴ゆえに¹²⁰、一切諸法は、怒り(瞋恚)を離れている。
- (6) 闇黒 (*tamo'ndhakāra) を離れているので、一切諸法は、愚かさ(愚癡)を離れている。
- (7) 始原より不生であるので、一切諸法は、やって来るといことがない。
- (8) 遷移 (*saṃkrānti) しないというあり方ゆえに (*yogena)、一切諸法は、去って行くといことがない。
- (9) 拠り所がないので、一切諸法は、とどまるといことがない。
- (10) 過去・未来・現在を離れているので、一切諸法は、三世を超えている。
- (11) 本性が一つであるので、一切諸法は、区別 (*viśeṣa) がない。
- (12) 業の異熟を離れているので、一切諸法は、不生である。
- (13) 行為の主体 (*kāraṇa) というものを認識しないので、一切諸法は、業の異熟がない。
- (14) 無作 (*anabhisaṃskāra) のあり方であるので、一切諸法は、作られたもの (*kr̥ta) ではない。

bsams pa tsam gyis sarvam utpadyate. (179.30)

¹¹⁸ Tib: chos kyi tshul rab tu dbye ba'i sgra. Ch1:法門之音. Ch2:清淨法音. Ch3:淨妙法音. Cf. Adsp 2: 「さて、長老スパーティは、世尊にこう言った。『世尊よ、どのようにしたら諸法の法としての特質が〔菩薩によって〕巧みに通達されますか』世尊が言った。『……このようにして、スパーティよ、諸法の法としてのあり方(道理)は巧みに通達されるのである』」 atha khalv āyusmān subhūtir bhagavantam etad avocat: katham bhagavan dharmāṇaṃ dharmalakṣaṇaṃ supratividdham bhavati. bhagavān āha: evaṃ subhūte dharmāṇaṃ dharmanayaḥ supratividdham(→ -viddho) bhavati. (60.1-9) これによれば、dharmanaya は dharmalakṣaṇa と同義であることがわかる

¹¹⁹ Cf. Śikṣ: 「〔空性は〕本性として寂静である」 upaśāntā ca svabhāvena. (145.16-17)

¹²⁰ Tib: smon pa med pa'i mtshan nyid kyis. Ch1:罽除衆想(相). Ch2:無有礙故. Ch3:以無有礙相故。

- (15) 無作為 (*anabhisamṣkrta) なるものは〔ことばで〕顯示される (*prabhāvita) ことはないの
で、一切諸法は、作為されたもの (*abhisamṣkrta) ではない。¹²¹ [P59a]
- (16) 生と滅とを離れているので、一切諸法は、無為 (*asamṣkrta) である。
- (17) 真実には生じていないので、一切諸法は、真実ではない。¹²²
- (18) 直ちに (*sakṛt, yugapad) 現観するあり方なので、一切諸法は、真実である。¹²³
- (19) 衆生を認識の対象とはしないので、一切諸法は、無我である。
- (20) 第一義であるので、一切諸法は、個我 (*pudgala) がない。
- (21) 知るということはないので、一切諸法は、知覚がない¹²⁴。
- (22) 愛憎がないので、一切諸法は、無関心 (捨 *upekṣā) である。
- (23) 執着がないので¹²⁵、一切諸法は、全くの無 (無所有)¹²⁶である。
- (24) 本性として汚されていないので、一切諸法は、随煩惱 (*upakleśa) がない¹²⁷。
- (25) 遠離の究極である (*vivekakoṭi) ので、一切諸法は、同一のあり方 (一理趣 *ekanaya) をし
ている¹²⁸。
- (26) 遠離を完成しているので¹²⁹、一切諸法は、遠離している。
- (27) 動揺がない (*akṣobhya) ので¹³⁰、一切諸法は、実際に住している。¹³¹

¹²¹ Ch1: 諸法無形哉、緣念而有。Ch2:諸法無起、無爲性故。Ch3:一切法無名、以不可得立名故。なお、abhisamṣkāra / abhisamṣkrta の原義については註 143 参照。

¹²² Tib: yang dag par ma byung ba'i phyir chos thams cad yang dag ma yin pa'o. Ch1: 諸法審諦哉、覺了眞實。Ch2:諸法眞不〔→不眞〕從和合性故。Ch3:一切法不實、以本不起故。

¹²³ Tib: cig car mngon par rtogs pa'i tshul gyis chos thams cad bden pa'o. Ch1:諸法至誠哉、爲同一等。Ch2:諸法實一道門故。Ch3:一切法實、以一道門平等故。

¹²⁴ Tib: bems po (*jaḍa). Ch1:愚。Ch2, 3:鈍。Cf. VKN: 「この身体は草・木片・壁・土くれ・影像に似て、知覚がない」 jaḍo (Tib: bems po) 'yam kāyas ṛṇakāṣṭhakuḍyaloṣṭapratibhāśasadṛśaḥ. (ch.2, sec.11)

¹²⁵ Tib: yongs su gzung ba med pa (*aparigraha). Ch1:爲無熱惱 (*aparidāha?). Ch2:無有熱。Ch 3:無有取。

¹²⁶ Tib: ci yang med pa (*akiñcana). Ch1:無著。Ch2, 3:離煩惱。

¹²⁷ Ch1:諸法無近哉。Ch2:諸法無垢。Ch 3:一切法無煩惱

¹²⁸ Tib: dben pa'i mtha' yin pa'i phyir chos thams cad tshul gcig pa'o. Ch1:諸法一品哉、眞際寂然。Ch2:諸法一相、離欲際故。Ch3:一切法一相、以眞際平等故。Cf. VKN 「すべての法に関して努力することもそれを放棄することもない〈一つのあり方〉という知」 sarvadharmānāyūhāniryūhaikanaya (Tib: tshul gcig pa) jñana (→jñāna). (ch.3, sec.73)

¹²⁹ Ch1:爲一一定。Ch2:常定故。Ch3:以常寂定故

¹³⁰ Tib: mi 'khrugs pa'i phyir. Ch1:因對而發。Ch2:性不壞故。Ch3:以性不壞故。

¹³¹ Cf. VKN :bhūtakoṭipratīṭhito 'tyantācalitatvāt. (ch3, sec.6)

- (28) 区別されることはまったくないので¹³²、一切諸法は、真如に住している。
- (29) あらゆるところに行き渡っているので、一切諸法は、法界に遍入している。¹³³
- (30) お互いによりあうことはないので、一切諸法は、縁をもたない。¹³⁴
- (30') ¹³⁵→ 平等性によって満たされているので、一切諸法は、縁によって生じたもの(縁已生)である。←¹³⁵
- (31) あるがままに見ることによって明らかにされるので、一切諸法は、悟りである。
- (32) 完成されていないというあり方によって¹³⁶、一切諸法は、涅槃している。

以上のように、カーシャパよ、世尊たる「あらゆる方向に光明の遊戯の光線をもつ王」という如来のかの光から、以上のような法¹³⁷のあり方(道理)を分析的に示すために、32の声が見れるであろう」

¹³⁸→ 長老マハーカーシャパが申し上げる。「世尊よ、かの光は、仏陀のなされること(仏事)をなします」

世尊が仰せになる。←¹³⁸ [P59b] 「カーシャパよ、かの如来の寿命は無量であろう。かの仏国土においては、魔のしわざに妨害されることはないであろう」

カーシャパが申し上げる。「世尊よ、仏国土を選び取り(*parigraha)たいと望む者は、この良家の子があらゆるすぐれた相(*ākāra)を持っているように、ちょうどそのように〔あらゆるすぐれた相を備えたものとして〕、清浄なる仏国土を選び取るでしょう」

世尊が仰せになる。「カーシャパよ、このように、ジャーリニープラバ菩薩は、十万コーティ・ナユタもの多くの仏陀のもとで、誓願を浄化したのである。それゆえ、彼は、そのような功德を完成した仏国土を選び取るのである。¹³⁹→ カーシャパよ、それゆえ、そのような仏国土を選び取りたいと思う良家の男子または女子は、ジャーリニープラバ菩薩を見習う(*anuśikṣā)べきである←¹³⁹」

(XV-3)

その時、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティン(V)は、ジャーリニープラバ菩薩(J)にこのように言った。「良家の子よ、あなたは如来によって授記されました」

¹³² Tib: shin tu tha mi dad pa'i phyir. Ch1:而縁破壊. Ch2:不分別故. Ch3:以本不壞故.

¹³³ Cf. VKN : sarvatrānugataḥ dharmadhātusamavasaraṇaḥ. (ch3, sec.6)

¹³⁴ Tib: phan tshun mi 'du ba'i phyir chos thams cad rkyen med pa'o. Ch1:諸法無縁哉, 不相雜錯. Ch2:諸法無縁, 縁不合故. Ch3:一切法無縁, 以諸法不合故.

¹³⁵ Ch1, 2はこの部分を欠く. Ch3:一切法諸縁生, 以満足平等故.

¹³⁶ Ch1:無衆事對. Ch2:無因縁故.

¹³⁷ BKLPhT: chos. CDHNP: chos thams cad.

¹³⁸ 3 漢訳はこの部分を釈尊のこととする. Ch1:以斯光明而照菩薩因作佛事. Ch2:能令諸菩薩施作佛事. Ch3:迦葉, 若有衆生生彼國者當知是人能作佛事.

¹³⁹ Ch1, 2はこの部分を欠く.

[Jが] 言う。「ブラフマー神よ、如来によって一切衆生もまた授記されています¹⁴⁰」

[Vが] 言う。「どのように¹⁴¹ 授記されているのですか」

[Jが] 言う。「業の異熟にしたがって授記されています」

[Vが] 言う。「良家の子よ、どのような業をなして、あなたはどのように授記されたのですか」

[Jが] 言う。「ブラフマー神よ、身・口・意によってなされたわけではない業を、〈これだ〉というふうを示すことができるでしょうか」

[Vが] 言う。「どうして〔示せましょうか〕¹⁴²」

[Jが] 言う。「悟り(菩提)には、作られたもの(*abhisamkāra¹⁴³)という特質がありますか」

[Vが] 言う。「そういうことはありません。¹⁴⁴悟りは、作られたものではないということの特質としているのであって、作られたものということの特質とはしていません」

[Jが] 言う。「作られたものによって無為である悟りを得ることができますか」

[Vが] 言う。「そういうことはありません」

[Jが] 言う。「ブラフマー神よ、そのようであるから、この場合、[P60a]この〔同じ〕論理によって(*anena paryāyena)、業もなく、業の異熟もなく、作られたものに入ることもないこと¹⁴⁵、それが悟りなのです。悟りがそのようであるように、〔悟りを〕得ること¹⁴⁶もまたそうであり、授記もまたそうなのです。作られたものによって授記されるわけではない、と知らなければなりません」

[Vが] 言う。「良家の子よ、〔あなたは〕六波羅蜜多を行じ、その後に、授記されたの〔ではないの〕ですか¹⁴⁷」

[Jが] 言う。「ブラフマー神よ、その通りです。六波羅蜜多を行じ、その後に、授記されたのです。ブラフマー神よ、¹⁴⁹一切の煩惱を完全に放棄すること、それが布施です。行動を起こさないこと(*anabhisamkāra)、それが持戒です。〔何ごとにも〕傷つくことがないこと¹⁴⁸、それが

¹⁴⁰ Cf. VKN: 「そのように、もしあなたが授記されたのであれば、すべての人々も授記されているのです」 *evaṃ yadi tvaṃ vyākṛtaḥ sarvasatvā api vyākṛtā bhavanti.* (ch.3, sec.51)

¹⁴¹ Tib: cir. Ch1:云何. Ch2, 3:於何事中.

¹⁴² Ch3のみ、ここに次の問答を挿入する：問言。「梵天，仁以何故而作是説。梵天，頗有菩薩行可作相耶」答言。「不也。以菩提非諸行相故」。

¹⁴³ abhisamkāra には、(1) はたらき・作用 (samkāra, sāmāthyā)(2) 行為、身口意の動作 (karman, vyāpāra)(3) 努力 (ābhoga, prayatna) 等の意味があるが、ここではそのすべてが含意されていると思われる。Ch1は「行」、Ch2,3は「起作」とする。Cf. VKN: 「大徳アニルツダよ、天眼には作られたものという特質があるのか、それともないのか。もし作られたものという特質があるのであれば、それは外道の五神通に等しい。作られたものという特質がないのであれば、作られたものでないものは無為であり、それゆえ、見ることはできない」 *kiṃ bhadantāniruddha divyaṃ cakṣur abhisamkāralakṣaṇam utānabhisamkāralakṣaṇam. yady abhisamkāralakṣaṇam tad bāhyaiḥ pañcābhijñāṇi samam, athānabhisamkāralakṣaṇam anabhisamkāro 'samskṛtas tena na śakyaṃ draṣṭum.* (ch.3, sec.30)

¹⁴⁴ チベット訳はここに smras pa(*āha) を入れて話者の転換を示すが、漢訳に従って同一話者の発言とする。

¹⁴⁵ Tib:mngon par 'du byed pa'i 'jug pa yang med pa. Ch1:無有行貌無行貌性. Ch2:無諸行無起諸行. Ch3:不作不行.

¹⁴⁶ Tib:'thob pa. Ch1:獲. Ch2:得. ch3:説.

¹⁴⁷ 3 漢訳はすべて否定疑問文(不行~乎、耶)とする。

¹⁴⁸ P: rma mi thong ba. DHKLNPhT:rma mi thod pa. B: rmi mthod pa(→rma mi thod pa). C: rma mi phod ba. Ch1:靡所不堪. Ch2, 3:於諸法無所傷. 註 185 参照. 次註における『首楞嚴三昧経』の忍辱波羅蜜多の Tib の説明は以下の通り: 「心は尽きることがないという法則とすべての対象に傷つけられることがないことが彼の忍辱波羅蜜多であ

忍辱です。遠離 (*viveka) が精進です。所住がないこと、それが禪定です。戲論がないこと、それが智慧です。←¹⁴⁹ ブラフマー神よ、六波羅蜜多を行じる菩薩はどこにおいて行じるのでしょうか」

〔V が〕言う。「どこにおいても行じません。なぜかといえば、行があるだけ、それだけ非行があるからです。行は非行なのです。非行は無上正等覚を行じることなのです」

〔J が〕言う¹⁵⁰。「ブラフマー神よ、それゆえ (*anena paryāyena), 非行が悟りの行であると理解すべきです。ブラフマー神よ、『あなたは如来によって〕授記されました』という〔先程のあなたの〕ことばは、真如と法界が授記されているように、そのように私もまた授記された〔ということな〕のです」¹⁵¹

〔V が〕言う。「良家の子よ、真如と法界は授記されません」

〔J が〕言う。「では、かの〔私への〕授記も、真如と法界と同じ特質 (*lakṣaṇa) をもっているのです」

(XV-4)

その時、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティン¹⁶³は世尊にこう申し上げた。¹⁶³→「世尊よ、どのように修行したら、菩薩たちは如来によって無上正等覚に関して授記を受けるのでしょうか」

世尊が仰せになる。「ブラフマー神よ、[P60b] もし菩薩が、生を行じることなく、滅を行じることなく、善を行じることなく、不善を行じることなく、世間を行じることなく、出世間を行じることなく、有漏を行じることなく、無漏を行じることなく、¹⁵²→ 罪を行じることなく、無罪を行じることなく←¹⁵², ¹⁵³→ 有為を行じることなく、無為を行じることなく←¹⁵³, ¹⁵⁴→ 道理 (*yoga) を行じることなく、不道理 (*ayoga) を行じることなく←¹⁵⁴, ¹⁵⁵→ 断を行じることなく、不断を

る」 gang sems kyi mi zad pa'i chos nyid dang yul thams cad kyi smas(→rmas) par mi 'gyur ba de ni de'i bzod pa'i pha rol tu phyin pa'o. (D 271a1)

¹⁴⁹ 直接の引用ではないが、清弁著『大乘掌珍論』の最末尾に次のような一節がある。

……能棄捨一切煩惱是名爲施波羅蜜多。能息一切所緣作意修無所得是名爲戒波羅蜜多。於諸所緣能不忍受是名爲忍波羅蜜多。無取無捨離一切行是名精進波羅蜜多。一切作意皆不現行都無所住是名靜慮波羅蜜多。於一切法不起戲論遠離二相是名般若波羅蜜多。此義廣如梵問經等處處宣說。(Taisho Vol.30 278a27-b5)

『首楞嚴三昧經』の前4波羅蜜もほぼ同内容である。

堅意，是菩薩一切悉捨心無貪著是檀波羅蜜。心善寂滅畢竟無惡是尸波羅蜜。知心盡相於諸塵中而無所傷是羼提波羅蜜。勤觀擇心知心離相是毘梨耶波羅蜜。畢竟善寂調伏其心是禪波羅蜜。觀心知心通達心相是般若波羅蜜。(Taisho Vol.15 633b29-c5, Tib:D 270b7-271a3)

¹⁵⁰ 文脈によりここで話者が転換するはずだが、Ch2及びチベット訳はそれを明示する語句(網明言, smras pa)を欠く。Ch1, Ch3により補う。

¹⁵¹ Ch3のみここで次のような同趣旨のことばを挿入する：梵天，依此法應知無行是菩薩行。梵天，如汝所言汝得受記。如真如及法界受記，如是我受記。

¹⁵² Ch1:不犯於行亦無不犯。

¹⁵³ Ch1:無有造行亦無不造。

¹⁵⁴ Ch1:不專修行不離專修。Ch2, 3:不行修道。

行じることなく^{←155}、輪廻を行じることなく、涅槃を行じることなく、見を行じることなく、聞を行じることなく、念(*smṛti)を行じることなく¹⁵⁶、知(*vijñāna)を行じることなく、¹⁵⁷→布施を行じることなく、喜捨を行じることなく^{←157}、¹⁵⁸→持戒を行じることなく、律儀(*samvara)を行じることなく^{←158}、¹⁶⁰→忍辱を行じることなく、不変化¹⁵⁹を行じることなく^{←160}、¹⁶¹→精進を行じることなく、勤行(*vīryāmbha)を行じることなく^{←161}、禪定を行じることなく、三昧を行じることなく、智慧を行じることなく、¹⁶²→行(pratipatti)を行じることなく、知(*jñāna)を行じることなく、得(*avabodha)を行じることがなく^{←162}、菩薩がもしもそのように振る舞う(行じる)ならば、如来によって無上正等覚に関して授記されるのである。^{←163}なぜなら、ブラフマー神よ、行は行である限り、目標(*adhikāra)とされる。悟り(菩提)は目標となるものではない。¹⁶⁴→行は行である限り、分別される。悟りは分別されるものではない。^{←164}行は行である限り、行動(*abhisamkāra)の対象とされる。悟りは行動の対象となるものではない。行は行である限り、戯論(*prapañca)の対象とされる。悟りは戯論の対象となるものではない。

ブラフマー神よ、以上のことから、この論理によって(*anena paryāyena)、一切の行を超越した菩薩たちには授記がなされる、と [P61a] そのように理解しなければならない]

(XV-5)

その時、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンは世尊にこう申し上げた。「世尊よ、[世尊は]授記、授記と仰いますが、その授記は何を指すことば(*adhivacana)なのでしょうか」

世尊が仰せになる。「一切の法に関して二つ〔の対立する想〕を離れている。それゆえ、授記という。生と滅を〔実在するものとして〕付託(増益*samāropa)することがない。それゆえ、授

¹⁵⁵ Ch1:無斷除行亦無不除. Ch2, 3:不行斷除.

¹⁵⁶ Ch1:無意念行. Ch2, 3:不行覺法.

¹⁵⁷ Ch1:而不行施亦無慳貪. Ch2, 3:不行施不行捨.

¹⁵⁸ Ch1:不奉梵行亦無所犯. Ch2, 3:不行戒不行覆.

¹⁵⁹ Tib: mi 'gyur ba (*avikāra). 「不変化」とは、(他者の行動などに対して)冷静沈着でいられること.

¹⁶⁰ Ch1:而無忍行亦無不忍. Ch2, 3:不行忍不行善.

¹⁶¹ Ch1:無精進行亦無懈怠. Ch2, 3:不行發不行精進.

¹⁶² Ch1:亦無不智亦無達行亦無所入.

¹⁶³ [引用] 『大乘掌珍論』

[Ch:] 如契經言.

「世尊、菩薩云何修行於其無上正等菩提、得諸如來應正等覺真實授記」「梵志、菩薩若於是時、不行於生不行於滅、不行於善不行不善、不行世間不行出世、不行有漏不行無漏、不行有罪不行無罪、不行有爲不行無爲、不行相應及不相應、不行生死及以涅槃、不行於見及聞覺知、不行於施及以棄捨、不行於戒及以律儀、不行於忍不行精進、不行靜慮不行等持、不行於慧不行於解、不行於智不行於證。菩薩如是行無所行、於其無上正等菩提、得諸如來應正等覺真實授記」(Taisho vol.30 277a20-b2)

¹⁶⁴ [引用] 『修習次第・後篇』(Bhāvanākrama III)

[Skt:] yac cāpi brhmaparipṛcchāyām uktam / yāvātī caryā sarvā parikalpyā / niḥkalpyā ca bodhir ity ādi / tatra (Bhk 24.1-2)

[Tib:] tshangs pas zhus pa las kyang / spyod pa ji snyed pa de dag thams cad ni yongs su rtog pa'o // yongs su mi rtog pa ni byang chub bo zhes bya ba la sogs pa gsungs pa gang yin pa de la (Peking ed. dBu-ma A 65b5-6)

一郷 [2011]120-121 頁参照.

記という。身・口・意の諸々の業を離れている。それゆえ、授記という。

ブラフマー神よ、私は思い出すのだが、過去時に、『美しき現れ¹⁶⁵』という劫があり、その〔劫〕において、72 ナユタの如来がおられ、それらの如来のすべてに、私は敬意 (*satkāra) を表し、尊敬 (*gurukāra) し、尊崇 (*mānanā) し、供養 (*pūjanā) した¹⁶⁶が、それらの如来がたは私に授記なされなかった。

その後、『すばらしく化作された (*sunirmīta 善化)』という劫があり、その〔劫〕において、72 コーティ¹⁶⁷の如来に、私は、敬意を表し、尊敬し、尊崇し、供養したが、それらの如来がたは私に授記なされなかった。

ブラフマー神よ、さらにその後、『梵天によって称賛された (*brahmaprasānsita 梵歎)』という劫があり、その〔劫〕において、一万八千¹⁶⁸の如来に、私は、敬意を表し、尊敬し、尊崇し、供養したが、それらの如来がたは私に授記なされなかった。

ブラフマー神よ、さらにその後、『よく指導された¹⁶⁹』という劫があり、その〔劫〕において、三万二千¹⁷⁰の如来に、私は、敬意を表し、尊敬し、尊崇し、供養したが、それらの如来がたは私に授記なされなかった。

ブラフマー神よ、さらにその後、『莊嚴¹⁷¹』という劫があり、その〔劫〕において、八万四千¹⁷²の如来に、私は、敬意を表し、[P61b] 尊敬し、尊崇し、供養したが、それらの如来がたは私に授記なされなかった。

¹⁸³→ ブラフマー神よ、私は、[一劫もしくは一劫以上にわたって]¹⁷³ 如来がたに、敬意を表し、尊敬し、尊崇し、供養した。彼らのもとで私は梵行を行じた。私はすべての所有物を喜捨した。私は戒と頭陀の功徳を護持し受け入れた。私は、¹⁷⁵→ 瞋という頑なさ (*khīla), 物惜しみ、思い上がり、[自らの過失の] 隠蔽¹⁷⁴ を無くしてのち ¹⁷⁵, 私は忍辱と慈心を修習した。¹⁷⁶ 禪定と遠

¹⁶⁵ Tib: mdzes par snang ba (*sundaradarśana?). Ch1, 2, 3:善見. Cf. LV : puṣpābhikīrṇāni virocante sma .(57.23) Tib: me tog sil mas gang ste mdzes par snang ba. (D 69b6)

¹⁶⁶ 仏典に見られる定型的表現。袴谷 [2000b] の言ういわゆる「崇敬の四連語」。以下に述べられるように、このような「作善」や「苦行」も「行」に執着したものとして否定するところに本経の特徴がある。

¹⁶⁷ Ch1, 2 : 二十二億. Ch3:七十二億.

¹⁶⁸ Ch3:八萬八千.

¹⁶⁹ Tib: legs par drangs pa. Ch1:欣樂. Ch2, 3:無咎. Cf. Pp : sunīta . (223.1) Tib:legs par drangs pa. (D 77a1)

¹⁷⁰ Ch1:三百二十萬.

¹⁷¹ Tib: bkod pa (*vyūha). Ch1:大演. Ch2, 3:莊嚴.

¹⁷² Ch1:八百四十萬. Ch2:四百四十萬. Ch3:四千八萬.

¹⁷³ Ch1, 3 のみ.

¹⁷⁴ Tib: 'chab pa (*praticchādāna). Cf. KP : 「カーシュヤパよ、次の二つが出家者にとっての傷である。二つとは何か。他者の過失を吟味することと自らの過失を隠蔽することである」 dvāv imau kāśyapa pravrajitasya vraṇau. katamau dvau. paradauṣapratyavekṣaṇatā ca svadauṣapratyavekṣaṇatā ca(sec.116).

¹⁷⁵ Ch1:離於結恨. Ch2, 3:離於瞋恚.

¹⁷⁶ 漢訳はここに「精進」に対応した文言を置く。Ch1:懇勲精進, 一切所聞皆苞覽持. Ch2, 3:如所説行動精進, 一切所聞皆能受持.

離を行じ、人里離れた所において〔そこで〕夜を過ごし¹⁷⁷ 食事をした。〔如来のお〕声に応じて質問をし¹⁷⁸、それを実現する精進によって聞いたことすべてを理解した¹⁷⁹。〔私はまた〕¹⁸⁰ それらの如来がたの名を一劫もしくは一劫以上にわたって唱えた。←¹⁸⁰ それにも関わらず、それらの如来がたが私に、無上正等覚に関して授記なされることはなかった。

それはなぜかといえば、ブラフマー神よ、このように私は、〈行じる〉ことに〔あくまで〕住していたからである¹⁸¹。それゆえ、ブラフマー神よ、この論理によって (**anena paryāyena*)、一切の行を超越した菩薩たちに対して授記があるのだと、そのように理解しなければならない。

ブラフマー神よ、¹⁸⁴ 私は、燃灯 (**Dīpaṃkara*) 如来にお会いしたときに、ただちに、存在(法)が〔本来〕不生であることを容認する知(無生法忍)を得た。その後、先ず、燃灯如来は私にむかって『汝は未来時に、数え切れない程の劫(阿僧祇劫)の後に、シャークヤ・ムニという如来・応供・正等覚¹⁸²となるであろう』と授記なされた。その後、私は一切の行を超越したのである。〔さらに〕その後、私の六波羅蜜多は完成した (**paripūrṇa*) のである。←¹⁸³ ←¹⁸⁴

それはなぜかといえば、あらゆる相 (**lakṣaṇa*) を放棄する者は、布施の完成に至るからである。あらゆる認識の対象 (**ālambana*) を鎮める者は [P62a] 戒の完成に至る。あらゆる対象 (**viṣaya*) に傷つけられない者¹⁸⁵ は忍辱の完成に至る。あらゆる法を遠離する者は精進の完成に至る。あらゆる精神集中 (**manasikāra*) に入らない者は禪定の完成に至る。本性として不生である法を容認する者は智慧の完成に至る。ブラフマー神よ、そのようにして、〔私は〕燃灯如来のもとで諸

¹⁷⁷ Tib: mal 'cha' ba. 「ベッドを準備する」の意。

¹⁷⁸ Tib: sgra'i rjes su 'gro ba'i dri ba yongs su dri ba.

¹⁷⁹ Ch1: 亦有講問音聲智慧. Ch2, 3: 隨所聞慧讀誦思問.

¹⁸⁰ 漢訳はこの部分を欠く。この部分は本来註 173 が示す場所にあったものと思われる。註 183 参照。

¹⁸¹ Ch1: 用所造行而有猗. Ch2: 依止所行故. Ch3: 以依止文字問於諸佛.

¹⁸² Ch1: 號能仁如來至真等正覺明行成爲善逝世間解無上士道法御天人師爲佛衆祐.

¹⁸³ [引用] 『大乘宝要義論』(Sūtrasamuccaya)

[Tib: tshangs pas zhush pa'i mdo las 'byung ba / tshangs pa ngas bskal pa'am / bskal pa las lhag par de bzhin gshegs pa de dag gi mtshan nas brjod cing / gang dag ngas chos de gang la ngas tshangs par spyod pa spyad cing / pha rol tu phyin pa drug spyad pa'i de bzhin gshegs pa de dag gis nga la lung ma bstan no // de ci'i phyir zhe na / 'di ltar tshangs pa nga spyod pa la gnas par gyur pa'i phyir ro // nam ngas de bzhin gshegs pa mar me mdzad mthong ma thag tu mi skye ba'i chos la bzod pa rab tu thob nas / de nas gdod nga lung bstan te / de nas nga spyod pa thams cad las yang dag par 'das so // de nas nga pha rol tu phyin pa drug yongs su rdzogs do // zhes ji skad gsungs pa lta bu'o // (SS 139.16-140.6, D Ki 193a7-b2)

[Ch: 如梵王問經云。佛言。「大梵、我於一劫若過一劫、宣說彼彼如來名字。若我供養是諸如來。或復於彼我修梵行及修六波羅蜜多。我於彼彼佛所未得授記。何以故。我於有所得行而依著故。若我爾時於燃燈如來所。纔見彼佛即得無生法忍。彼佛世尊與我授起(→記)。我於爾時超過一切有所得行。而復圓滿六波羅蜜多。(Taisho vol.32 66c3-10)

BP の本文では、一部の順番がこの引用とは異なり、また、六波羅蜜の内容説明が詳細になっている。

¹⁸⁴ [引用] 『大智度論』

[Ch: 如前所說持心經中。我見錠光佛時得諸法無生忍。〔……〕初具足六波羅蜜。(Taisho vol.25 275a17-19)

¹⁸⁵ Tib: gang yul rnams la rmas par mi 'gyur ba de ni bzod pa'i pha rol tu phyin pa'o. Ch1: 忍於諸界名忍度無極. Ch2: 不爲六塵所傷名爲屬提波羅蜜. Ch3: 不爲境界所傷名爲屬提波羅蜜. 註 148 参照。

波羅蜜多を完成した (*paripūrṇa) ののである。

(XVI-1)

ブラフマー神よ、初発心してより以後の布施・喜捨は、その後の、いかなるものも認識の対象としない布施・喜捨¹⁸⁶の百分の一にも及ばず、ないし、[計算や]¹⁸⁷譬喩の対象にもならない。最初の戒の学習および頭陀の功德を集積 (*samādāna) した戒は、かの極めて清浄なる持戒¹⁸⁸に対しては、[計算や]譬喩の対象にもならない。初発心してより以後の忍辱と抑制 (*niyama) は、かの究極的な忍辱の法そのものの原因にもならない。初発心してより以後実修してきた精進は、かの不取捨の精進に対しては、[計算や]譬喩の対象にもならない。初発心してより以後の禪定・遠離住(独処)は、かの無相の寂静に対しては、[計算や]譬喩の対象にもならない。ブラフマー神よ、初発心してより以後の智慧による観察 (*pratyavekṣā) は、かの戲論のない智慧に対しては、[計算や]譬喩の対象にもならない。それゆえ、ブラフマー神よ、この論理によって (*anena paryāyena)、このように、私はその時、六波羅蜜多を完成したのである、とこのように理解しなければならない」

(XVI-2)

〔梵天が〕申し上げる。「世尊よ、どのようにしたら、六波羅蜜多を完成するのですか」

〔世尊が〕仰せになる。「喜捨に対する驕慢 (*manyānā) がなく、戒に住することなく、[P62b] 忍辱を分別することがなく、精進に執着せず、禪定に住せず、智慧に対して二つ〔の対立する想〕がないこと、これが、ブラフマー神よ、六波羅蜜多における完成 (*paripūrṇa) である。

〔梵天が〕申し上げる。「世尊よ、六波羅蜜多を完成してのち、何を完成するのでしょうか」

〔世尊が〕仰せになる。「ブラフマー神よ、六波羅蜜多を完成してのちは、一切知者性¹⁸⁹を完成する」

〔梵天が〕申し上げる。「世尊よ、どのようにしたら、六波羅蜜多を完成してのち、一切知者性を完成するのですか」

〔世尊が〕仰せになる。「ブラフマー神よ、布施波羅蜜多の平等性 (*samatā)、それが一切知者性の平等性である。持戒波羅蜜多の平等性、忍辱波羅蜜多の平等性、禪定波羅蜜多の平等性、智慧波羅蜜多の平等性、それが一切知者性の平等性である。それゆえ、この平等性は、一切法の平等性であり、一切法の平等性は一切知者 (*sarvajña) の平等性である。

さらにまた、ブラフマー神よ、布施の想 (*saṃjñā) を完成し、持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の想を完成して、一切知者性を完成する。一切知者性は、すべての想から離れることである。その

¹⁸⁶ Ch1:五蓮華供養之徳. Ch2:此五華布施. Ch3:此捨相布施.

¹⁸⁷ Ch2,3 のみ.

¹⁸⁸ Ch1:禁順戒. Ch2, 3:常滅戒.

¹⁸⁹ Tib:thams cad mkhyen pa nyid (*sarvajñatā). Ch1:諸通慧. Ch2, 3:薩婆若. Tib には、このほか、thams cad mkhyen pa (*sarvajña), thams cad mkhyen pa'i ye shes (*sarvajñajñāna) の形が見られるが、それぞれ「一切知者」「一切知者の知」と訳す。なお、『八千頌般若経』でも一切知者性と波羅蜜多の関係が論じられているが、あくまでも智慧波羅蜜多との関係であって、智慧(般若)を特別視せず必ず六波羅蜜多との関連で論じている本経とは少しく論点が異なる。Asp「カウシカよ、この供養すべき如来・正等覚の全知者性は智慧波羅蜜多の所産である」yeyam kauśika sarvajñatā tathāgatasyārhatāḥ samyaksambuddhsya prajñāpāramitānirjātaiṣā. (29.12-13); 「アーナンダよ、智慧波羅蜜多に取り入れられて〔他の〕五波羅蜜多は一切知者性の中に立つ」ānanda prajñāpāramitāsaṃgrhītāḥ pañca pāramitāḥ sarvajñatāyāṃ pratiṭhante.(41.1-2)

ように、ブラフマー神よ、六波羅蜜多を完成することによって、一切知者性を完成させる¹⁹⁰のである」

〔梵天が〕申し上げる。「世尊よ、一切知者性を完成するとはどういうことですか」

〔世尊が〕仰せになる。「眼に拠らず、[P63a]色に拠らず、ないし、意と法に拠らないこと、また、ブラフマー神よ、内と外の六処に拠らないこと¹⁹¹、これが、一切知者性を完成することである。ブラフマー神よ、そのように、一切知者性を完成すれば、眼に執着せず、耳に執着せず、鼻に執着せず、舌に執着せず、身に執着せず、意に執着しない。それゆえ、如来の一切知者の知(*tathāgatasya sarvajñajñāna)は、無執着であり無礙なのである。ブラフマー神よ、一切知者性はいかなる法にも依拠しない。¹⁹²→ブラフマー神よ、このように、一切知者性は、一切法の器(*pātra)となるものではない←¹⁹²。ブラフマー神よ、『器ではない』というのは、〔そこに容れる〕もの(実体*vastu)が存在しない¹⁹³、ということ指すことば(*adhivacana)である。『ものが存在しない』とは、戸外の広々とした空間(露地)¹⁹⁴を指すことばである。一切知者性¹⁹⁵は、戸外の広々とした空間と同じである。それゆえ、いかなる法にも依拠しない。ブラフマー神よ、たとえば、虚空(*ākāśa)の中でこそ、あらゆるなすべきことがなされるが、その虚空〔自体〕は〔どこにも〕住することがないように、一切知者性にあらゆる知が依拠している(*vyavasthita)にもかかわらず、一切知者性〔自体〕は、住することがないのである」

(XVI-3)

〔梵天が〕申し上げる。「世尊よ、一切知者性、一切知者性と仰いますが、世尊よ、なぜ、一切知者性¹⁹⁶と仰るのですか」

〔世尊が〕仰せになる。「(1)¹⁹⁷→ブラフマー神よ、声聞たち・独覚たちのあらゆる行動(*caryā)を、それによって知る。それゆえ、一切知者性というのである←¹⁹⁷。(2)¹⁹⁹→彼らのあらゆる思念(*āśaya)をよく知り、修行(*prayoga)をよく知り、悲心(*karuṇā)をよく知り、学習(*śikṣā)

¹⁹⁰ Cf. VKN: 「仏陀の特相を完成させるから無為に住することなく、一切知者の知を完成させるために有為を滅することはない」 buddhalakṣaṇaparipūraṇatvād asaṃskṛte na pratīṣṭhati, sarvajñajñānaparipūraṇārtham saṃskṛtam na kṣapayati (ch.10, sec.19).

¹⁹¹ Ch1:其有無内亦有無外, 而不所由亦無所受亦不自念. Ch2:若不受是内外十二入. Ch3:若如是觀察内外六入.

¹⁹² Ch1:所以者何, 若欲成就諸通慧器則不成器. Ch2:何以故, 以無用故. Ch3:何以故, 以薩婆若非受法器故.

¹⁹³ Ch1:無有器. Ch2:無所有. Ch3:無物能受盛.

¹⁹⁴ Tib: bla gab med pa (*abhyavakāśa). Ch1:暴露. Ch2:空如虚空. Ch3:空同虚空. Cf. Asp 25.30 : abhyavakāśagata (Tib: bla gab med par song).

¹⁹⁵ B: thams cad mkhyen pa nyid. CDHKLNPPHT: thams cad mkhyen pa.

¹⁹⁶ BDKLPhT: thams cad mkhyen pa nyid (sarvajñatā). CHNP: rnam pa thams cad mkhyen pa nyid (sarvākārajñatā).

¹⁹⁷ Ch1:諸通慧者假託名耳. 悉無所著普了衆行, 無有聲聞緣覺之事, 名諸通慧. Ch2:一切所行是智爲真, 非諸聲聞辟支佛所及故, 名薩婆若. Ch3:一切諸行彼薩婆若智知所謂聲聞辟支佛及一切世間. 以是義故名薩婆若.

をよく知り、信受¹⁹⁸をよく知る。それゆえ、一切知者性という←¹⁹⁹。(3)一切の行動(**pracāra*)を捨て、一切の分別(**manyānā*)を滅することが一切知者性である。(4)²⁰⁰→得ることがなく知ることもないが、[P63b]一切の衆生の心の動き(**cittacarita*)がそこから知られるから、それゆえ、一切知者性という←²⁰⁰。(5)²⁰¹→すべてを現観(**abhisamaya*)する知、有学の知、無学の知、独覚の知、そして一切知者の知(**sarvajñajñāna*)をも、そのようなものとして成立させている(**vyavasthāpana*)ので、一切知者性という←²⁰¹。(6)正しく行じることによって、ここから知が発動するので、それゆえ、一切知者性という。(7)すべての薬をよく知っているので、それゆえ、一切知者性という。(8)すべての病を鎮めるので、それゆえ、一切知者性という。(9)すべての束縛を断ち切るので、それゆえ、一切知者性という。²⁰²(10)習気による相續(**vāsanānusaṃdhi*)をすべて滅してしまうので、それゆえ、一切知者性という。(11)常に三昧に入っている(**samāhita*)ので、それゆえ、一切知者性という。(12)一切の法に対する疑念がないので、それゆえ、一切知者性という。(13)世間・出世間の知がこの一切知者性²⁰³から成立している(**vyavasthāpita*)ので、それゆえ、一切知者性という。(14)ブラフマー神よ、それゆえ、一切知者性²⁰⁴とは、一切知者の知(**sarvajñajñāna*)に巧みなことを指す言葉である」

その時、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンは世尊にこう申し上げた。「世尊よ、このように、如来が一切の衆生の心の動き(**cittacarita*)をすべて知りながらも、心の対象に入ることがない(それらを認識の対象とすることはしない)ことは、不可思議で未曾有の仏陀の知であります。世尊よ、それ(一切知者性)には、このような優れた功德(**guṇaviśeṣa*)が無量にあります。世尊よ、これら〔の功德〕を見て、良家の子であれ良家の子女であれ、一体誰が、無上正等覚に向けて心を起こさないことがありますか」

(XVII)

¹⁹⁸ Tib: yang dag par 'dzin pa. Ch3:諸發起修行. Cf. *Asp*:「具寿スプーティよ、このように智慧波羅蜜多が説かれているときに、それを信受するのはどのような人でしょうか」ke 'syā āyusman subhūte prajñāpāramitāyā evaṃ nirdīśyamānāyāḥ pratyeṣakā bhaviṣyanti (20.28-29); tshé dang ldan pa rab 'byor shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di ltar bstan pa 'di la su dag yang dag par 'dzin par 'gyur (D 23b1-2). このほか、yang dag par 'dzin pa は「しっかりと保持する(*Śikṣ* 17.1 :saṃdhārayan)「正しく理解する(*Pp* 498.2 : samyag grahītum)」の訳語としても用いられている。

¹⁹⁹ Ch1:探一切念而療治之、名諸通慧. Ch2:諸有所行皆能成就故、名薩婆若. Ch3:諸有所行平等智、知諸心、知諸行、知諸慈悲、知諸學、知諸發起修行故、名薩婆若。

²⁰⁰ Ch1:智不可限曉衆生行、名薩婆若. Ch2:諸所教勅諸所防制、如此衆生所行之法皆從中出故、名薩婆若. Ch3:如實知說不說、如實知一切衆生心行故、名薩婆若。

²⁰¹ Ch1:分識一切隨時、而順有所學、不復學緣覺之慧、無所不達應時現教、名諸通慧. Ch2:得諸聖智、若學智、若無學智、若辟支佛智、皆從中出故、名薩婆若. Ch3:如實知一切證智故、名薩婆若. 如實知無學智聲聞辟支佛智、如實知一切種智、皆是薩婆若中出. 以是義故名薩婆若. Ch3 は、「すべてを現観する知(*ye shes thams cad mngon par rtogs pa*)」を独立させているが、Ch2 は、学・無学・独覚の知を総括してそれを「諸聖智」としている。また、チベット訳中の「一切知者の知(**sarvajñajñāna*)」は Ch1, 2 には対応語は見られないが、Ch3 は「一切種智(**sarvākārajñāna*)」としている。Ch3 は「一切種智」を仏陀に特有の知と見ているのであろう。『大智度論』は「一切智」と「一切種智」の異同について述べているが、これについては川崎 [1992]111-117 頁参照。

²⁰² Ch1, 2 は (9) の部分を欠く。

²⁰³ BPh: thams cad mkhyen pa nyid. CDHKLNPT: thams cad mkhyen pa.

²⁰⁴ チベット訳 10 本は、すべて、thams cad mkhyen pa (**sarvajña*) とする。

その時、世尊に向かって、ジャーリニープラバ菩薩はこう [P64a] 申し上げた。

「世尊よ、誰であれ、功徳を求めようとして悟りに向かう菩薩たちは、大乘に向かって出発した (*mahāyānaśaṃprasthita) のではないと理解しなければなりません。なぜかといえば、世尊よ、求めることがないので、一切の法は功徳を離れており、無功徳なのです。それゆえ、菩薩たちは、功徳のために、あるいは善のために、悟りに向かうべきではないのです。そうではなくて、大悲を因として、[(1) 衆生の苦悩を除くために、]²⁰⁵ (2) 自らの苦を怖れないがために^{206, 207} (3) 善なる法を生じるために、(4) 邪見から解脱するために、(5) あらゆる病を取り除くために、(6) 執着しているものを捨てるために²⁰⁸、(7) 親しいものと親しくないものとを〔区別して〕見ないことのために、(8) 世間法に汚されることがないために、(9) 有為を厭うために²⁰⁹、(10) 涅槃に安住するために²¹⁰、(11) 正法を護持するために、(12) 衆生を成熟させるために、世尊よ、菩薩は、願うことなく、返報を求めることもないのです。世尊よ、菩薩は、作すことと作さざることと対して後悔することはありません²¹¹。世尊よ、菩薩は楽と苦とに悩まされることはありません。

世尊よ、菩薩たちの清浄なる善根²¹²とはどのようなものでしょうか」

世尊が仰せになる。「良家の子よ、転輪聖王の地位が清浄なる善根であるとは言わない。帝釈天になることもそうではないし、梵天になることもそうではない。²¹³→ 生まれることと生まれる場所のないことが、菩薩たちの清浄なる善根である。^{←213} 自分自身、決して善根を減らすことなく、極端な場合 (*antaśas) には畜生の生まれる場所に行く [P64b] ことまでして他の衆生に善根を生じさせること、これが、菩薩たちの清浄なる善根である。

²¹⁹→ すべての実体 (*vastu) を見ないので²¹⁴、喜捨が菩薩たちの清浄なる善根である。苦悶する²¹⁵ことがないので、持戒が菩薩たちの清浄なる善根である。怒りの心 (*vyāpāda) がないので²¹⁶、忍辱は菩薩たちの清浄なる善根である。懈怠心がないので、精進が菩薩たちの清浄なる善根である。心を専一にしている*(ekāgra) ので²¹⁷、禅定が菩薩たちの清浄なる善根である。邪

²⁰⁵ 3 漢訳のみ。

²⁰⁶ Ch1: 忍於己勞不以厭倦不畏終始以無量故。Ch3 は (2) の項目を欠く。

²⁰⁷ Ch1 は他版にない一句を加える：不斷佛教故、護正法故、敬聖衆故。この部分は Tib の (11) に相当するのかも知れない。

²⁰⁸ Ch1: 救濟一切生善處故。

²⁰⁹ Ch1: 嶮道逐生死令得出故。

²¹⁰ Ch1 は「人々が無為にいて安穩になるようにさせるために」として文を終結し、(11)(12)の要素は含まない。Ch2, 3 も、「涅槃に安住するために、菩提心を起こす」として同じく、文を終結し、(11)(12)の要素は含まない。Ch1 は全体を<人々の救済のために>とするのに対して、Ch2, 3 は<自らの修行道の完成のため>を中心とする。この点は Tib も同様である。

²¹¹ Ch1: 不爲衆生有所造作而有怖望亦無所疑。

²¹² Ch1: 菩薩種性清淨。Ch2: 菩薩家清淨。Ch3: 菩薩摩訶薩諸善根清淨。

²¹³ 3 漢訳はこの部分を欠く。

²¹⁴ Tib: dngos po thams cad la mi lta ba'i phyir. Ch1: 無所怙故。Ch3: 以捨一切資生故。

²¹⁵ Tib: yongs su gdung ba (*paridāha). Ch1, 3: 熱惱。

²¹⁶ Ch3: 以心不分別故。

²¹⁷ Ch3: 以不念餘乘故。

見を離れているので²¹⁸，智慧が菩薩たちの清浄なる善根である。←²¹⁹ ²²³→ 心が平等であるので，慈が菩薩たちの清浄なる善根である。決意 (**adhyāśaya*) が清浄であるので²²⁰，悲は菩薩たちの清浄なる善根である。法に対して信解を生じさせるので²²¹，喜が菩薩たちの清浄なる善根である。好悪というものが無いので²²²，捨が菩薩たちの清浄なる善根である。←²²³ 声聞・独覚の位階 (**bhūmi*) を欲することがないので，菩提心を捨てないことが菩薩たちの清浄なる善根である」

²¹⁸ Ch1:無闇蔽故.

²¹⁹ Ch2 はこの部分を欠く.

²²⁰ Ch2:深心念故. Ch3:以直心清浄故.

²²¹ Ch2:生法喜故. Ch3:以樂諸法不生愛故.

²²² Ch2:離貪著故. Ch3:以離諸過故.

²²³ Ch1:慈悲喜護等興法樂除意瑕穢，是則菩薩種姓清浄. Ch1 はこの部分を六波羅蜜多の説明の前に置く.

<一次文献・略号> (校訂テキストまたは西藏大蔵経)

- AA *The Aśokāvadāna : Sanskrit Text Compared with Chinese Versions*, edited annotated and partly translated by Sujitkumar Mukhopadhyaya, New Delhi, 1963.
- Adsp1 *The Gilgit Manuscript of the Aṣṭādaśasāhasrikāprajñāpāramitā*, Chapters 55 to 70, Corresponding to the 5th Abhisamaya, edited and translated by Edward Conze, Serie Orientale Roma 26, Roma, 1962.
- Adsp2 *The Gilgit Manuscript of the Aṣṭādaśasāhasrikāprajñāpāramitā*, Chapters 70 to 82, Corresponding to the 6th, 7th and 8th Abhisamayās, edited and translated by Edward Conze, Serie Orientale Roma 46, Roma, 1962.
- Asp *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, edited by P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts(BST) No.4, Darbhanga, 1960. Tib: 'Phags pa Shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa, Tohoku No. 12 (Shes phyin Ka 1b1-286a6).
- Bhk *Bhāvanākrama : Minor Buddhist Texts Part III Third Bhāvanākrama*, Giuseppe Tucci(ed.). Serie Orientale Roma XLIII, Roma, 1971.
- BP *Brahmaviśeṣacintipariṣcchā*.
- Gv *Gaṇḍavyūhasūtra*, edited by P. L. Vaidya, BST No.5, Darbhanga, 1960.
- KP *Kāśyapaparivarta*, A. von Staël-Holstein (ed.), Shanghai, 1934; *The Kāśyapaparivarta Romanized Text and Facsimiles*, M.I. Vorobyova-Desyatovskaya (ed.), Tokyo, 2002.
- Krp *Karuṇāpuṇḍarīka*, edited with Introduction and Notes by Isshi Yamada, Vol.II, London, 1968.
- Laṅk *Saddharmalaṅkāvatārasūtra*, edited by P. L. Vaidya, BST No.3, Darbhanga, 1963.
- LV *Lalitavistara*, edited by P. L. Vaidya, BST No.1, Darbhanga, 1958. Tib: 'Phags pa rGya cher rol pa, Tohoku No.95 (mDo sde Kha 1b1-216b7).
- Mv *Mahāvastu*, 3 vols., É.Senart (ed.), Paris, 1882,1890,1897.
- Pp *Madhyamakavṛttiḥ, Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasan-
napadā Commentaire de Candrakīrti*, par Louis de la Vallée Poussin, St.Pétersburg, 1913.
- Pvsp *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, edited by Nalinaksha Dutt, Calcutta Oriental Series No.28, London, 1934.

- Śikṣ* *Śikṣāsamuccaya*, edited by P. L. Vaidya, BST No.11, Darbhanga, 1961.
SP *Saddharmapuṇḍarikasūtra*, Kern and Nanjio (eds.), St.Petersburg, 1912.
SN *Samyutta-Nikāya*, 5 vols, PTS., 1884-1898.
SS *Nāgārjuna's Sūtrasamuccaya : A Critical Edition of the mDo kun las btus pa*, Edited by Bhikkhu Pāsādika, 1989, Copenhagen.
Sukh *Sukhāvāṭīvyūha*, Atuuji Ashikaga (ed.), Kyoto, 1965.
VKN *Vimalakīrtinirdeśa, Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese Translations*, edited by Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, 2004.

<二次文献・略号> (辞書・索引類)

- AD* *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, by Prin. Vaman Shivaram Apte, Revized & Enlarged Edition, Kyoto, 1978 (臨川書店).
BHSD *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Volume II: Dictionary*, by Franklin Edgerton, New Haven, 1953; reprint Delhi, 1970.
Mvy *Mahāvvyutpatti*: 『梵藏漢和四譯對校・翻譯名義大集』鈴木學術財団, 1916.
TCD *A Tibetan-Chinese Dictionary*: 『藏漢大辭典』(上・下), 張怡蓀主編, 民族出版社, 1993.
TD 西藏佛教研究会『藏文辭典』, ゲシェー・チョエキタクパ著 民族出版社 1957年; 山喜房佛書林 1972年.
TSDS *Tibetan Sanskrit Dictionary Supplementary Volume*, ed. by Lokesh Chandra, New delhi, 1992-94; Compact Edition, 2009(臨川書店).
『広説』 『広説 佛教語大辭典』中村元著, 東京書籍, 2001年, 縮刷版 2010年.

<三次文献> (論文・著書)

- 一郷正道 [2011]: 『瑜伽行中觀派の修道論の解明—『修習次第』の研究—』2008年度~2010年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 成果報告書(課題番号 20520049).
辛嶋静志 [2006]: 「一闍提 (icchantika) は誰か」『法華經と大乘經典の研究』山喜房佛書林, (253)-(269)頁.
川崎信定 [1992]: 『一切智の研究』春秋社.
五島清隆 [1988]: 「『梵天所問經』研究ノート(2)—Viśeṣacintin と Jālinīprabha の二菩薩について—」『印度學佛教學研究』# 36-2, (50)-(55)頁.

- [2003]: 「チベット訳テキスト校訂と写本大蔵経—『思益梵天所問経』を中心に——」『印度學佛教學研究』# 52-1, (53)-(57)頁.
- [2009]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(1)」『インド学チベット学研究』# 13, 141-184頁.
- [2010]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(2)」『インド学チベット学研究』# 14, 89-125頁.
- 袴谷憲昭 [2000a]: 「pramāṇa-bhūta と kumāra-bhūta の語義: bhūta の用法を中心として」『駒澤短期大學佛教論集』# 6, 328-299頁.
- [2000b]: 「『法華経』と『無量寿経』の菩薩成仏論」『駒澤短期大學佛教論集』# 6, 228-248頁.
- 平川 彰 [1995]: 「文殊師利法王子と一生補処」『印度哲学仏教学』# 10, 1-20頁.
- 宮元啓一 [2004]: 『般若心経とは何か——ブツダから大乘へ』春秋社.
- 村上真完 [2003]: 「Vyūha(莊嚴)考——特に Gaṇḍavyūha の原意について」『印度哲学仏教学』# 18, 5272頁.

An Annotated Japanese Translation of the Tibetan Version of the *Brahmapariṣcchā* (3)

Summary

The third volume (*bam po gsum pa*) of the Tibetan version of the *Brahmapariṣcchā* begins with a dialogue between the Bodhisattva Samantakusuma and the Sthavira Śāriputra about the relationship between the *dharmadhātu* and *prajñā*. This topic is intimately related to the dialogue between the Brahmā Viśeṣatintin and the Kumārabhūta Jālinīrabha at the end of the second volume, during which they expounded that things are all created magically and therefore incomplete by nature, and that practice is non-practice (i.e. that action is non-action).

When he is asked to explain the reason for his name, Jālinīrabha emits Light (*prabhā*) in the ten directions from the nails of the webbed (*jāla*) fingers of his right hand. This light soothes all sentient beings and makes them content. Four bodhisattvas dwelling in a world in the downward direction are stimulated by this ray, and come to Sahā world to express their respect for the Buddha Śākyamuni and Jālinīrabha. This episode suggests a link with the *Saddharmapuṇḍarīka*.

The above episode corresponds to the first half of this volume. The main topics of the second half are the “assurance of future enlightenment (*vyākaraṇa*)” and “omniscience (*sarvajñatā*).” Before Jālinīrabha is assured of enlightenment by the Buddha, he and the Sthavira Mahākāśyapa discuss the nature of the assurance of future enlightenment and the practice (*caryā*) of the bodhisattva. It is interesting to note that 頓悟大乘正理決 (*Sudden Awakening as the Ultimate Truth in Mahāyāna*) by the Chinese Monk Mahāyāna (摩訶衍) (Pelliot No.4646) and the *Third Bhāvanākrama* by Kamalaśīla, which are both historical documents of the controversy held at the Temple bSam yas in Ti-

bet, quote the identical section of this Sūtra as the authority behind their assertion. While the former denies the existence of what is called practice, the latter asserts that practice without any attachments (that is, practice superseding the duality of practice or non-practice) is essential to practitioners, and that denial of practice in its entirety is contradictory to the teaching of the sūtras (especially of the *Brahmapariṣcchā*). The Sūtra continues to preach that the six perfections (*pāramitā*) are completed by entering into the state of non-duality (*advaya*), upon which the practitioner obtains omniscience. The analysis of omniscience in this text is rather detailed compared to other early Mahāyāna-sūtras.

<キーワード> 法界 (dharmadhātu), 六波羅蜜多 (ṣaṭpāramitāḥ), 地涌菩薩, 幻化 (māyānirmita), 授記 (vyākaraṇa), 非行 (acaryā), 一切知者性 (sarvajñatā)